塩川香世

巫女の思い

UTAの輪会員

巫女の思い

はじめに

今から二年ほど前に、「卑弥呼、悲哀から目覚めへ」という冊子が発行されています。その冊子は、田池先生のホームページに掲載された卑弥呼の思いを中心に、それぞれが自分の中の巫女の思いに心を向けて、自分の反省へと繋いでいきましょうという内容でした。

卑弥呼、巫女の意識を変えていくということは、学びをする私達には避けて通れない課題のひとつであることを、私はずっと以前から自覚していました。田池先生ご存命中に卑弥呼、巫女のお勉強をさせていただいたことに深く感謝しています。

それから数年の時が経ちましたが、巫女の心を引きずったまま転生を繰り返してきたということ、そのことを皆さんに本当に知っていただきたいという思いが、私の中で浮かび上がってきたのです。だから、二〇一八年の橿原セミナーには、私は次のような思いで臨みました。

「日々の生活の中で使っている心は、巫女の時に使ってきた思いです。その思いをしっかりと見てください。そして、明るい方向へ、お母さんの温もりの中へ返してまいりましょう。」

その橿原セミナーを経て、学びの友が自分の中に上がってきた巫女に対する色々な思いを再び綴

り、それを自分の学びの糧にしようとＵＴＡブックさんに原稿として提出してくださいました。その原稿が冊子としてこのように完成しました。

その原稿に思いを向け、もう一度巫女のほうに思いを向けてみます。

神の声を聞くために厳しい訓練を積み重ねてきた私達でした。そして、今、私達は田池留吉の学びと出会い、自分の中の巫女の思いをそれぞれがしっかりと確認する時期に至っています。

今、私達は巫女の思いをしっかりと聞いて、その思いとともにともに帰ろう、母なる宇宙へ帰っていこうとする意識の流れの中で、巫女の心も明るい方向へ目覚め始めています。

すべて間違ってきました。巫女は、本当に辛く切なく悲しく、何とも言葉では表現できない思いを抱えてきました。幼かった。幼き心の中にしっかりと蓄えてきたエネルギーでした。神の声を聞くあなたは素晴らしいと、そのようにもてはやされ、私達は自分の身も心も自ら滅ぼしてまいりました。

その思いを抱えて転生を繰り返してきた、そういっても過言ではございません。神の声を聞く、神のしもべとなる、そんな思いでずっとずっと生き続けてきた意識を、本当に母の中へ、温もりの中へ、本当の自分、安らぎの中へ返してください。

どなたも巫女(みこ)の心をもう一度、自分の中に思い起こし、そして巫女とともに歩いていく喜びを感じてまいりましょう。

すべては喜びです。私達は、今、アマテラスを供養している最中です。アマテラスに思いを向けるとき、巫女の思いがあなたの心に語ってくるでしょう。

「巫女、巫女、私達は巫女。苦しい、苦しい、切ない、切ない、とてもとても言葉で言い尽くせない思いを抱(かか)えて生まれてきた。」

このことをしっかりとあなたの心の中で感じていってください。そして救ってください。自分を救ってください。どうぞ、田池留吉の意識の世界の中で、お母さんの中へ、巫女の心を戻してまいりましょう。

塩川 香世

難波宮廷内の復元（大阪歴史博物館）

難波宮跡の彼方に二上山が見える（大阪歴史博物館から撮影）

この冊子に掲載している写真は、塩川香世さんのお住まいする上町丘陵、この地にあった「難波宮」から難波大道を通り、堺市の金岡あたりで「竹内街道」に合流、さらに「竹内峠」を越えて「近つ飛鳥」「二上山」、「今井町」「藤原京」を経て「橿原」へ、さらに横つ道を通り「飛鳥」へ入る古代の官道と、「初瀬川」から「山辺の道」を通るルート、そして滋賀の「大津京」、三重の「斎宮御所」へいたる一連の風景画像を使用しております。

編者が若い頃から撮影し続けてきたものですが、この古代大和国家建国期の重要なポイントと、主要なセミナー開催地がリンクしているのに気付いたとき、いささかの戸惑いと驚きを感じ、「アマテラス」の供養がいかに大きな意味を持っているかを感じたものでした。

また、今回の巫女の思いを新たに冊子化するにあたり、編者自身も写真の面で参加したく掲載させていただくことにしました。カメラを向けるという行為自体、何に心を向けたかの証だと思っておりますし、箸休め的に写真を入れることで、少しでも読みやすいものになればとも思っております。（桐生敏明）

巫女の思い

（二〇一八年七月に寄せられた意識）

1

苦しい心、やるせない心、胸につっかえて、どうすることもできないまま、その反省は続いていました。

私に伝えてくる苦しみを、そうなんだ、そうだったと気付き、その心とともに向き合える場は、やっぱりセミナー会場の数分の時間でした。底知れずある悲しい意識と出会い、深く向き合える唯一の場だと言ってもいいかもしれません。家での瞑想ではそこまで深く向き合うことができない私です。

先日の橿原セミナーでの苦しい巫女の私と真向かいになった時、（どうして今まで放っておいたのか、何がともに帰ろうだ）と、訴える巫女の心と同じ空間にいた私の肩に香世さんの手を感じた瞬間に、ウオー ウオーと唸り声を上げ、底から

「わたしは、ともに帰ります」

途切れ途切れの言葉を発していました。

ごめんなさいごめんなさいと田池留吉を呼び続けるだけでしたが嬉しかったです。

家に帰り、翌日のお風呂の中で、あっ！あの言葉は、私の中に存在する巫女の言葉だったと、気が付きました。どうしてあのような言葉を私は言ったのだろうかと、セミナー中不思議でしたが、本当に嬉しかったです。

このようにして、巫女に向ける時間を持つだけでよかったんだ。何も分からなくてもいい。出会うことが大事だった。瞑想の時間を作ることの大切さを教えてもらいました。

何度やっても同じだと投げやりになる心は、本当に冷たい心でした。私なんか、私なんかと、嫌う心の傲慢さを知りました。聳える心でした。

聳え続けた私の中から諦めないで伝え続けてくれる苦しい意識から、温かさが伝わってきます。ありがとう。ありがとう。ごめんなさいです。

これからこのように瞑想の時間を作っていこうと思います。残された時間には限りがありますが、中の苦しい心と出会えることを喜んでいきます。瞑想の大切さを心で感じさせてもらいました。ありがとうございました。

2

ああ、苦しかった。ただただ苦しかった。逃げたかった。逃げられなかった。神の力を、この我に下さい。生き延びる為に、神を呼び続ける選択しかありませんでした。女の肉体を持って生まれてきたことを呪いました。お母さん、どうして私はあなたから離れなければならなかったのですか。私をどうして捨てたのですか。お母さん、私は捨てられたのですか。ああ、神を求める思い、見るのも怖い恐怖の中で、私は自らのエネルギーで狂いました。そうです。自分の向けたブラックのエネルギーのその中で、私は、狂って狂って狂いながら、その肉を終えました。私のこの思い、あなたの中でしっかりと生きております。あなたが心を向けてくださったこと、ああ、この息も絶

難波宮復元模型

え絶えの中で、恐怖と呪いで固まってきた心、語ってもいいですか、語ってもいいんですか。私は、ただお母さんを求めていました。お母さんに会いたかった。お母さんを求め続けた。本当に本当にお母さんだけだったんです。私が本当に求めていたのは、お母さん、あなただけでございました。巫女の心は恐怖で凍りついた心、破壊、破壊、破壊、破壊、私が求めてきたパワーは破壊のエネルギーでした。素晴らしくあらねばならない。誰よりも誰よりも誰よりも、と周りを蹴落とし、自分だけが特別であるという思いをどんどんどんどん膨らませてまいりました。

ああ、苦しい。ああ、夢から覚めると、またこの厳しい現実だけが待っている。自ら死ぬことも許されない。だけど、私は、ああそうです。本当に狂い死にました。ああ、私の人生は何だったのか。ああ、この肉を終える瞬間、恐怖の中で思うのは母のことでした。母の姿を思いました。お母さん、あなたの許に帰りたい。お母さん、お母さんの姿を見て、お母さんの胸に飛び込んでいきたい。私、頑張ったんだよ、私、つらかったんだよ、私、苦しかったんだよ、そう素直に素直に母に言いたかった。それは叶いませんでした。

3

苦しい、悲しい、寂しい、お母さん……、そんな心を一切出すことさえできなかった巫女の心。どれほど自分を縛り、心を縛り、一心不乱に巫女を勤め上げる、それが私の心。研ぎ澄まされ、見事なまでに作り上げてきたアマテラスの世界。その世界に自らが酔いしれ、決して決してそれが苦しいとは思わない、思えない、そんな心に成り果て、むしろその世界から脱落していくことのほうが苦しみだと、完璧なまでにアマテラ

スに覆い尽くされた私の心の世界。

そんな私が、田池留吉の温もりに触れるたびに、何かが変わる。お母さんと呼びたかった自分の心が、心の本当に心の底の底の奥底から湧き上がってくる。「お母さん」呼べば呼ぶほどに、自分の中の苦しかった、寂しかった思いが湧き起こる。

抑えて、抑えて、抑え込んできた思いだった。お母さんと呼びたかった私の心に触れ、喜びが込み上げる。呼んでいいんだ、いつでも、どこでも、どんな状態にいても、お母さんを呼ぶことはできたんだと思いが変わる。

呼べないと思っていた自分が間違っていました。いつでも、どんな時でも呼ぶことができました。そして自分を語っていくことができるのです。

お母さんの思いの中で、自分を語る喜びの自分に出会っています。とても嬉しいです。誰はばかることなく、ただただ自分の思いを語れる、その喜びと幸せ、やっとやっとそういう自分に出会いました。

4

ああ、どこからどう話をすればいいのか……、ああ、なにもかもをとり違えてきたのでした。ここに行き着くまで、それはそれは永く永く、気が遠くなるほどの転生を続けてきました。どれほど転生を重ねても、それは、もっと自分を闇の奥へ奥へと落ちるばかりでした。そう生きることしか心にはなかったからでした。私、そう私は肉だと、それしかなかったから、私、母、環境、すべてが形だとしてきたから、けれど、そう言葉にできる今、それはそれは、何を持ってしても、これ以上の温もりはありません。唯一、どれほどの漆黒の

闇をも解かしてくれる答えです。はい、すべてを根底から間違い続け、間違い続け、そのことに気付くことなど、あり得ませんでした。繰り返し、繰り返し、どれほどの愛に包まれていても、それを瞬時に葬り去るほどに、肉という思いは強く強く、心に打ったくさびのようでした。そのくさびは自らを打ち、自らを腐らせていきます。けれど、それすら、自分以外のせいにし続けてまいりました。

自分以外は何もありませんでした。自分以外に存在しているものはありませんでした。永く永く、自らを地獄の奥底に陥れることしかできなかった、哀しいまでに愚かな私でした。愚かな自分に肉を持たせて頂いた、そう思えることは、奇跡です。唯一、真実を目の前にすることができたからこそ、思える優しさです。ありがとうと、偽物の言葉しかなかった私に、本当の、「ありがとう」が心に染み渡ります。

ありがとうありがとう、お母さん、ありがとう。お母さん、お母さんでした。

苦しい、哀しい、寂しい……、たくさんの思いを自分と思い続けてまいりました。それを自分だとしてまいりました。間違ってまいりました。私は愛でした。私は愛、こんなにこんなに母の温もりに包まれてりました。いつもいつも、ずっとずっと、ずっとずっと、変わりなく、幸せでした。ずっと、私は愛でした。幸せです。ずっと、このままでいい。これが私でした。

何もありませんでした。私、苦しい、誰が、これが、こうなった、何かが……。すべてが消えていきます。すべてが包まれていきます。包まれていたんです。ありがとうと、もとあったところへ帰っていきました。なにもなかった、なにも、私が作り上げ、自ら、苦しいと作り上げていただけでした。ありがとうと、広がって、何もなくなって、安らぎだけが広がっています。ありがとうご

仏教導入をめぐって神道派の物部氏と崇仏派の蘇我氏が、二上山の麓あたりから八尾にかけてを戦場として闘った。写真は八尾にある聖徳太子古戦場（大勝軍寺）

物部守屋の首塚

難波宮から奈良へ向かう途中、四天王寺があります。ここは物部氏（神道派）と蘇我氏（仏教派）が仏教導入をめぐって戦った崇仏戦争、その勝利の証として聖徳太子が建てたと言われています。

この争いは、奈良の二上山の麓あたりから、今の八尾あたりを戦場として戦われました。その際、物部氏は「物部の八十乙女」という巫女軍団を、蘇我打倒の祈りのため戦場にかり出したと言われています。

これに対し、蘇我氏は、聖徳太子を中心に四天王に戦勝祈願をおこないました。その地が八尾の大勝軍寺ということで今に残っています。戦勝の証として建てられたのが、この大勝軍寺であり、四天王寺という訳です。

ざいます。ありがとう、ありがとう……。
かえろうかえろう、もうみんなともに、温もりに、すべてが私、すべてが一つ、間違ってきた自分とともに。

5

今も使っている思いが巫女の時にも使っている。私の中にある不信の心です。誰も何も信じられない。いつも用心し、人を信じることがなく用心している私がいます。どれほどの思いをかけてもいつかは裏切られるとの思いが心の底にあります。だから人を信用しない自分があります。信じられたのは今世初めて出会った田池留吉先生でした。それ以外は誰も信じられないと警戒、警戒の心を使ってきました。まったく巫女の時に使った思いそのものです。信じた人に捨てられ自分の悲しい思いと恨みに心を落としていった過去世達とまったく同じです。もう信じるものなどないと思いながら生きてきた心に本当の真実の愛に目覚めなさいと出会わせてくれた私の意識がありました。

今世こそ真実の信じても間違いない本当のことに出会えたのでした。このチャンスを逃してはもう救いようがない自分を感じています。私の防御の鎧は頑丈で「人を信じない」からスタートしてきました。そんな私を信じて、信じて待ってくれる意識があると心に伝わっています。私が帰るところはこの世界しかない。温かく優しい広い温もりと安心の中です。アルバートに出会えた心が警戒からだんだん緩んでいきます。この波動を信じて心を緩め開いていけばいいのだと私の意識たちに伝えています。もう恐怖から解放していけるのだよとともに学んでいけるのだと伝えていける今世の私は本当に幸せな意識です。

シナリオとはいえ約束を果たしてくださった母にもう感謝しかありません。お母さんありがとうございました。きっときっと二五〇年後につないでまいります。硬い警戒の鎧を脱いで軽くなってまいります。ありがとうございました。

6

最近、よく思っていること、「私って冷たいな」。日々、ここかしこに現れるという巫女の思いを、私は無視し続けて生きている。巫女を意識するのは橿原セミナー中だけ。でも、今日になって、恐怖の裏返しとも思った。心からお母さんを呼べないから、奥へ踏み込めない。母の温もりを求めているつもりで、「お母さんなんて呼んでたまるか！」って叫んでいる矛盾。

この学びに集ってからの自分。お母さんよりも、母の温もりよりもパワー。お母さんなんて呼びたくなかった。お母さんを呼べなかった。お母さんなんていらない。この思いこそが、まさに巫女でした。肉の努力はできても、肝心な母を呼べない。この学びに臨む姿勢こそが、まさに巫女でした。

最近、些細なことで怒りが止まらない。原因とは全く釣り合わない大きさの、怒りのエネルギー。ぶち切れまくって、現象で言い慣れた「くそっ」も出てしまう。今世は肉が強いから、狂うような敏感さは持ち合わせていないからって、高をくくっていたけれど、どうにも止まらない、コントロールできない自分を感じる。散々怒りまくって、ふと「これも巫女なの？」と思ったら、フッと収まった。巫女の思いかどうかの真偽はともかく、心の針を中へ変えるって、こういうことなんだ？自分のエネルギーに振り回され続けない。

私は、巫女の私と向き合えてなかった。哀れで

寂しい巫女の私など、認めたくなかったんだ。巫女の自分と、真剣に向き合うことから始めよう。巫女の心を引き金にアマテラスを解放していく、そのルートに自分をちゃんと乗せていきたい。

7

私は小さい時から、自分の心を語ってきませんでした。語れば自分のすべてが駄目になる、そんな恐怖をいつも抱えて、素晴らしい自分を演じてきました。苦しみの中で、心はいつも戦っていました。認めよ、認めよ。素晴らしい自分を認めよと。認めてくれない母を捨てました。アマテラス、アマテラス、そうです、アマテラスこそ私の願いを叶えてくれる。喜びでアマテラスのもとに、はせ参じました。あれだけ喜びだったのに、母のいない心は寂しさの中にまっしぐら。寂しくて、寂しくて、その心を消し去るために修行しました。誰よりも一番になるために、見捨てた母に勝つために、命がけで修行の毎日です。私は素晴らしい言葉を語ってきました。なのに、何故なのですか。語れば語る程に、苦しみの中に落ちていく。私は狂って、狂ってこの世を去りました。今、やっとこの苦しみを語ることができました。語ることが恐怖でした。語れば抹殺されると。

ああ、今やっと、語りなさいと、優しい優しい温もりの中で、私は語ることができました。お母さんを捨てたことが間違いでした。お母さん、お母さん、私は心の底からお母さんを呼んでいます。お母さんを呼べることが幸せでした。お母さん、ごめんなさい。自分が偉くてお母さんを呼ぶことができなかったんです。どんなにお母さんを抹殺しても、お母さんは待ってくれていました。真っ暗闇の中で、肉を頂き、愛の

中に一つだと、あなたは伝えてくれました。私は母なる宇宙の中に一つでした。信じて信じて、アマテラスとともに田池留吉、アルバートとともに心のふるさと、愛へ帰る道を一歩、一歩進んでいきます。

今世もアマテラスの心、そのままに苦しみの中でした。語ってくれてありがとう。喜んで喜んでともに心を見ていきます。じんわりと喜びが伝わってきます。アマテラスありがとう。

8

巫女の時の自分は毎日が苦しみでしかありませんでした。厳しい修行の毎日でした。私はいくら頑張ってやってもできの悪い私で恐怖と寂しいのとで恨(うら)み、呪(のろ)いしかなかった。お母さんを何度も何度も呼び続けました。でもお母さんは来ない。お母さんをずっと恨んで呪い続けてきました。そして、狂って死んでいった私を感じます。だからこんな苦しいのを思い出したくなかったです。

でも今回の橿原セミナーで巫女に向けていきたいと思い友達とセミナー会場で出し始めたけど途中で逃げてしまいました。でもこんなチャンスに今度こそって思い、また友達とセミナー会場で巫女に向けました。ひっくり返ったり悲鳴を上げていると段々嬉しくなり「ごめんね、ごめんね、私なのに逃げてしまってごめんね」って思いが上がってきました。

そして、セミナーで一番前列にいる人達を呼んでくださった。巫女に向けるとやはり悲鳴しか出てこなかった。でも段々嬉しくなってきて立ち上がってぴょんぴょん飛んでいました。

本当に長い間無視してきて申し訳なかったです。自分に冷たかったです。この巫女のときに使ってきたエネルギー、今世も全く同じでした。田池留吉ありがとうございます。

9

心の中にたくさんの私がいる。巫女の時の思いに心を向けると、悲しくて、寂しい自分、特殊な環境の中で巫女になるべく、訓練をして、不安と恐怖の中で、自分の処し方を探してきた自分がたくさんいた。その苦しい自分に気が付いてよかった。その苦しい自分と出会い、その心を愛に帰していける今がうれしい。

今世田池留吉にであい、真実の学びをすることができた。私は何者か、それを伝えてくれた。本当の私は愛、そして自分の中の苦しい意識たちを愛に帰していく方法を伝えてくれた。それは千載一遇のチャンスだった。今まで苦しくて、たくさんの神を拝み、神に祈ってきた愚かな自分の姿を思うとき、その心がいまだに残っていて、肉の生活の中で使っていることに気が付いた。巫女時代に使った、周りの力関係を察して自分の処し方を考える心、本心を決してさらけ出してはいけない、自分の立場を良くするために、自分を偽ってきたことを感じる。そんな愚かな自分とどんどん出会い、どんどん変わっていける今がうれしい。苦しかった自分に愛を伝えられることがうれしい。

私は愛、そして苦しい闇を包んでいく、そのために肉体をいただいた今世、心を見るということを通して、自分の闇を愛に帰し、本当の愛へ帰る道筋を歩いている今世、それが喜びだ。

心がだんだん軽くなり、心がだんだん大きく

なる、それが喜びだ。

10

私たち三姉妹、常々巫女として争ってきた過去を感じます。

負けるものか、負けてなるものか、あいつよりも上に行ってやる。認めさせてやる、今に見ていろ！ お前なんかぶっ潰してやる。私は年離れて三女として生まれたため、母にはとてもかわいがられました。姉からすればうらやましいことですが、言葉を換えれば窮屈でした。

十九歳で結婚して家を出たとき、ホッとした自分を今でもはっきりと覚えています。大きく両手を広げて大空に向かって深呼吸する。これでもう束縛されることはないぞ、と。

そして母にも戦いのエネルギーを流しました。母は簡単に子育てに嘘を取り込みました。私の

竹内街道を進むと石川に突き当たるが、これを渡るため往古の時代より臥龍橋（羽曳野市）が利用されてきた。右正面に二上山が遠望できる。

心は傷つきました、たった十二歳で母の言うことばかり聞いてられないと思うようになりました。又私も母に平気で嘘をつき、利用するようになっていきました。こんなふうに子育てをするんだと言わんばかりに自分の子育てをしていきました。「お母さん、私はこうしてほしかったんです」ということを自分の子供になぞらえて、母に見せつけました。お金がなくても決して母に弱音を吐かない、私がそこにいました。

母を責めた……弱音なんか吐くもんか……。

今世、母であったけれどもお母さん、お母さん、あなたも同じ巫女として一緒だった。今、そのように感じています。二十歳の主人だけが頼りの家族との同居でほとほと疲れ果てていた十九歳の私が出産するとき、義母は主人には仕事に出なさいと言い、私には産まれてから実家に連絡するというものでした。私は心細くて心細くて不安と恐怖になり、早朝五時でしたが、看護婦さんに頼み、母に連絡してもらいました。「お母ちゃんがおらな絶対産まれへん、お母ちゃん早く来て！ お母ちゃん、お母ちゃんが来れば大丈夫、はよ来て、お母ちゃん」私の心はお母ちゃんと叫び続けました。お母ちゃんは痛いか痛いかと私の背中をさすり続けてくれました。そこにはお母ちゃんしか信じられない私がいました。

私達家族は二上山の見える谷で生まれ、育ちました。一族がここで生まれ育ったといっても過言ではないです。朝にはウグイスが鳴き庭にはメジロがやってくる。そんな自然の中で生活していました。病院もなく人々が助け合って生きているそんな村でした。ほとんどが同じ葡萄作りを生活の糧として存在していた為に競争も絶え間なかった。顔では笑い、心ではけなし合うことが幼心にも感じられました。

まさしく巫女の時代に使ってきた心そのものです。そしてそんな一族が田池留吉に出会い、とも

にともに帰ろうとしている、帰るんだ、帰れるんだと叫んでいます。心が雄叫びをあげています。それぞれが約束してきたことを全うし、来世の自分に繋げようとしています。私たちは幸せです。田池留吉に出会った私たちは本当に幸せです。

11

「巫女の心を引きずったまま今世生まれてきた」

そう聞いたとき、ああ、そうだった、私と巫女はともに存在してきた。心の中でどんどん浮上してきた思いがあります。

苦しかった、寂しかったという表現よりも、「私はここに存在しています。感じてください。気付いてください。今世にすべてを託して、あなたを信じてきた思いわかりますか？

ようやく、この思いを語れる喜び。喜びをあなたに伝えています。ああ、うれしいです。ともに学べる喜び、待ちわびてまいりました。苦しかった、タイケトメキチと叫ぶこの思いは喜びです」

驚きました。私が感じてきた巫女の過去は、恨みと怒りと恐怖を心に秘め、もう二度と触れるものかと封印してきました。

飛び出してくることを恐れてきました。お母さん、助けてください。助けてくれぬなら……と、母を何度も切り捨ててきました。自分から逃げてきました。

今世、この学びと出会い、田池先生と出会い、「お母さんの反省をしてください。心をみてください」そう伝えられました。瞬時に「なぜ今更母なのか、なぜ私が心を見ないといけないのか。私は間違っていない」と思いました。

私に起こる現象一つ一つが、織りなすように心を揺らし、学ぶように学ぶようにいざない続

けてくれました。委ねていくだけでした。でも、苦しい巫女の思いにこの学びを盾にして、反転を使い、また封印してきた私でした。

ああ、ごめんなさい。私はすべてを委ねて、お母さん、タイケトメキチの思いの中で語り合えばよかったんだ。

「苦しかったね。伝えてくれてありがとう。ともにお母さんを思いましょう」と、この肉を通して伝えていくのは喜びでした。巫女の思い、私の中の切なる思いは、喜びでした。

お母さん、今世私を生んでくださりありがとうございます。ともに学んでまいります。

12

巫女を思えば、一気に胸が苦しくなります。目指す方が確かにありました。何時となくその人を目指し、その人の意のままに、本心の自分を語ることなくやり過ごしてきました。はじめはそれで良いのだと思えたのに、いつしか友と競い、蹴落とさなければ、消えてしまうそんな中での生活。酷いこともやり通し、嫌な自分だとわかっていても嘘でごまかし、自分に言い聞かせます。仕方なかったのだと、自分に言うのです。

そんな自分に、絶望しながらも容赦なく、力をぶつけます。いつの間にか、相手に探りを入れるんです。そうしないと、自分がその渦の中に、飲み込まれてしまう。恐怖でした。それしかないのです。いまも、自分を上手く語ろうとします。上手く語れなくて、口を閉ざします。

欲しいものを、取り込もうと考えた挙句に、とんでもない事態を招くのです。「お母ちゃん、こんなところに来たくはなかった」と、「私をどうぞここから出してよ」と、言いながら自分でない自分を、大きく大きくしたのです。私は今

も自分から進んで物事に取り組むことができません。不安がありすぎて、失敗することが怖いのです。一度誰かがやり方を教えてくれるまで、しようとしない。できない。

失敗の程度にかかわらず、嫌なのです。自分から友達を作ることも苦手です。巫女の時に使った心が私をこんなふうにさせるのか、このような巫女の世界に生きた自分だったことを知って初めて今に尾をひいていると思うのかもしれません。

13

厳しい修行を積んできた。自分が誰よりも秀(ひい)でる為に、日夜研鑽(けんさん)の日々だった。しかし、心は苦しかった。戦いの最中から抜け出せずに常に他よりも自分、の世界は、本当に苦しかった。誰よりも秀で頂点に立ち、政を司(つかさど)る巫女、であった。

しかし、心はのたうち回っていた。

常に常に針のむしろであった。

ほっとする時などなかった。

母を見下し、すべてを見下し己が一番であった。しかし、その末路の何と悲惨(ひさん)なものであったか……、永遠に、その心の地獄から抜け出せないと思っていた。

アマテラスを奉(たてまつ)り、アマテラスとともに生きてきた。ああ、本当に苦しい日々でした。そんな私に愛があると、申されるのか……？ほっておいてほしかった。もう誰にも構われることなく静かに心は岩となって眠っていたかった。それを今あなたは、甦(よみがえ)らせようと言うのか？私も愛だと言うのか……。

アマテラスを信じてきました。ともにともに一心同体、化身(けしん)として、アマテラスの化身とし

て、それが、巫女として生きるということでした。でも、今、もうその必要はないと申される、できることなら避けて通りたかった。できることなら見放しておいてほしかった……。しかし、心の奥底では、この苦しい心を救いたかった。自分を救いたかった……ああ、ありがとうございます。

私は、あなたの中に住む巫女でございます。あなたとともに、心を見てゆきます。田池留吉、アルバートの世界をもっともっと伝えて下さい。私も本当は出会いたかった。本当の愛に出会いたかった……。

ありがとうございます。今、心が少し軽くなりました。

14

卑弥呼に憧れ夢を持ち卑弥呼のもとに馳せ参じたけれど、その世界は想像を絶するような過酷で、ただただ苦しみだけが広がっていく世界。

足を引っ張り、引き摺り落とすエネルギーが渦巻く中で、誰も頼れず、誰も信用することのできない世界で、神の声を聞くことのできない落ちこぼれの巫女達は恐怖地獄を生き地獄を味わう日々。苦しい、苦しい、苦しいと泣き叫ぶしかなく、出てくる思いはすべてを恨んで憎んで呪い、僻み、妬み、羨む、凄まじいエネルギーばかり。

何でこんなに苦しい思いをしないといけないのかと、母親を恨んで憎んで呪うエネルギーをどんどんどんどん膨らませ、母親を呼びたくて

も素直に呼べない。

そんな中で、唯一の慰(なぐさ)めは二上山を眺(なが)めながら「お母さん」と呼ぶことだけ。二上山はいつも両手を広げ温かくて優しい波動で包んでくれていた。そのときだけが唯一心が休まるときだった。

ああ、でも今、私は素直に自分の心を語っています。語ることで心の中がどんどんどんどん解(と)き放(はな)たれていくのを感じます。温かくて優しい温もりの中に存在しているのを感じます。何か優しい思いが伝わってきます。

（伝わってくる思い）

あなたは、あなたが流す凄まじいエネルギーで苦しんでいただけなんですよ。お母さんの温もりを捨てた瞬間から苦しみの世界へと転落してしまいました。あなたは温かくて優しい温もりの世界に存在していました。本当のあなたは喜びと温もりのエネルギー、愛ですよ。心を見て、流してきた凄まじいエネルギーを認め修正し、本当のあなたに蘇(よみがえ)ってまいりましょう。

（巫女の時の自分の思い）

ああ、お母さん、お母さん、お母さん、何度、何度、こうして心の底からお母さんを呼びたかったか……。今、素直にお母さんを呼べることが嬉しいです。私は私が流す凄まじいエネルギーで苦しんでいたのですね。自分で自分を苦しめていたのですね。間違って生きてきたのですね。心を見てまいります。ありがとうございます。

15

巫女（二〇一八年七月五日）

お母さん、こんなところへ来たくなかった。素

晴らしくならなくても立派にならなくても人の上に立たなくても神の声が聞けなくても、卑弥呼様のようにならなくてもいい、何が卑弥呼様、実態は聞かされていたのとまるで違う、卑弥呼め、死ね、騙された、皆も騙されている、でも一生ここから出られない、狂って殺される方がマシ、毎日太鼓が鳴り響く、叫び声をかき消す太鼓の音、悲しい響き。

卑弥呼もこうなるとは思っていなかったと思う。はじめは純粋な気持ちだったが、民が卑弥呼を持ち上げ神のように扱い、親は己と子の幸せのため子を卑弥呼に捧げる。恨んだ。大人に利用された悲しい人生。苦しい毎日。修行の名の下、ありとあらゆることをさせられた。拒絶は死を意味する。まさに地獄絵図。神に仕える者の実態は狂った集団。幸せを求めることは人を狂わせることだった。神という言葉を使えば敬虔に思う。その言葉に騙された。その実態は恐ろしい化け物。お母さん、助けて、ここから連れ出して……。

田池留吉に心向けましょう。

思いを語れなかった、自分の思いが分からないほど自分を消し去った。嫌だと心は叫んでも恐怖から相手に従った。分かってる感じてる、神と通じてる、演じて騙すことが自分を守る方法、バレないかと戦々恐々としてきた。生きた心地しない。そんな中、お母さんを思う。

この一瞬が安らぎ、この一瞬だけを支えに修行に耐えた。お母さんを思うあの安心感。お母さん、幸せだった、何も要らなかった。

田池留吉、苦しかった。卑弥呼や親のせいにしてきたけれど、卑弥呼に出会う前から使ってきた思いを見るために設定し苦しいからこそあの一瞬が光る。感じた思いは確かに私の中にあ

る。お母さん、私が求めてきたものは、既に私の中にあったのか。

お母さん、ありがとう、肉を繋いで頂きました。田池留吉に出会えました。田池留吉は真実を伝えてくれました。田池留吉、ありがとう。巫女の私とともに帰ります。

巫女2（二〇一八年七月十三日）

今世使っている思いはすべてが巫女の時からだと今は納得です。肉が終わればすべてがなくなるのではなく、私は思いとして生き続けていたのです。

何もかも嫌で、消えろ、私も含めすべて消えてなくなれ、そう思ってきました。人間関係に苦しむと、私の思いを失くすことが人と上手く生きる方法、戦わなくて済む方法だと思い、自分の殻に閉じこもってきました。私の人生なのに、私はどこにもいない。表面はそうでも、心の中ではすべてを叩きのめしたい思いが煮えたぎっていました。

それでも立派な人素晴らしい人を目指さないといけない。位が高く、上に行けば行くほど立派で素晴らしいという思いが強かった。だから頑張るが、どこかでブレーキが掛かる。頑張る私と頑張り切れない私が混在する。私がしたいこと、どう生きたいのかさえ分からない。あなたのためにと口車に乗せられ騙されたと気付いた時はもう遅く、もう誰も信じられない、大好きなお母さんさえ信じられない。でも呼ぶのはお母さん、助けを求めるのはお母さん。助けて、ここから出して、お母さん、苦しいよぉ、私はどうすればいいの？涙も枯れ果て、沈むしかできなかった。

すべてを拒絶し男性恐怖症も自殺願望も恨みも呪いも他力も、すべてが過去からだと納得で

田池先生とツバメの群(む)れの旅立ちを見送ったなつかしい思い出。

近(ちか)つ飛鳥・風土記の丘の歴史博物館　死者の塔

竹内街道が石川を渡った場所に聖徳太子ゆかりの地「太子町」があり、その太子町に隣接して「河南町大宝」があります。ニュータウンとして開発されようとしたとき、渡来系技術者の群集古墳が発見され、開発は途中でストップ、「近つ飛鳥　風土記の丘」という古墳公園となり、歴史博物館が建てられました。

この大宝の地に、亡くなられた田池先生は住まわれていました。

上の写真は、博物館に展示された卑弥呼の再現模型。

右の写真は群集古墳の一つ。
天蓋が外れ、羨道と石棺が露出している。

聖徳太子の古墳と伝えられている (太子町　叡福寺)

す。私はたくさんの私とともに生き続けていました。たくさんの私と存在していることが何だか嬉しいです。思いを見るための現象だった、自分に出会ってくださいと愛の中にあったと分かると全部良かった、全部が愛しい。自分への思いが、大嫌いから愛しさに変わっているのがまた嬉しい。私の中にもこんなに優しい私があったのですね。苦しかったね、辛かったね、苦しんだままの私を救えるのは私しかいなかった。自分と向き合う、自分の心を見る、こんな優しくて温かいことはなかった。ありがとう、田池留吉、ありがとう、お母さん、ありがとう、ありがとう。

16

巫女の時に使っている心は日常生活で使っている心そのものです。

怒り、呪い、憎しみ、一瞬ですさまじいエネルギーが出てきます。

巫女の時に権力者、卑弥呼に認められる為、神の言葉を聞いた、気に入られるお告げだけを伝えた。不利になるお告げは伝えなかった。

卑弥呼に利用されてきた、己の権力を誇示する為に、私達巫女は利用されてきた。用がなくなれば、皆殺されてきた。そのために、神の言葉を聞く能力を研ぎ澄ませた。

己を認めてほしい、認めさせることだけが母や家族と引き離された寂しさを埋める手段だった。寂しければ寂しいほどその思いは大きく大きく広がっていった。そうすることで気が狂うほどの寂しいエネルギーをごまかせた。そのためには、たくさんの巫女を蹴落とした。人を人とも思わぬ心を膨らませた。我こそ一番、我こ

そが一番の巫女、この地位を脅かすものに呪術を使い殺した。呪術が通用しないものが唯一我の存在を脅かす存在だった。その者の吐く言葉、態度、存在そのものが疎ましかった。常に戦い、策略、凄まじいエネルギーが卑弥呼を頂点とする周りの巫女たちに渦巻いていた。

すべては母から引き離された寂しい心を封じ込めるためだった。寂しい心は殺戮のエネルギーだった。ただ単に寂しいと思う心にはこんなにも凄まじいエネルギーが流れていた。

そんな転生の繰り返しだった。

こんな自分にも帰れる場所があった、ようやくようやく長い転生の歴史の中で今世伝えてもらった。暖かい、暖かい母のぬくもりに帰っていける。ずっとずっと待ち続けてくれた本当の自分。自分の中にはこんなにも暖かい心があった、凄まじいエネルギーの奥底にはこんなにも暖かい心がある、そのことを伝えてもらい感じた。そのために母が生んでくれた。田池留吉に出会いなさいと生んでくれた。

日々の生活の中にある凄まじい巫女のエネルギーとともに田池留吉に思いを向けていきます。

ありがとうございました。

17

私の中の思い、今もそうですがとにかく人に頼りすがりお願い、お願いの心がとてもとても強いものでした。田池留吉に出会わなかったらその思いだけで、自分を信じず捨てどれだけ自分を蔑ろにしてきたか、心を見ることもなく、ただ生きてきただけでした。

アマテラスを抜きにして私の心は語れません。ある人を私はアマテラスの思いとして、ただた

だ服従してきたのでした。表面はそれが喜びとして思っていた。でも私の中はくそっくそっ、良い格好するな、嘘つき嘘つき、くそっくそっの反発一杯でした。すべて私の心の学びでした。自分を全く捨て人に頼る心の強さに辟易していました。頭では間違っていると思っても自分を捨ててきた思いをどうすることもできなかった。

ある事柄から崇める対象では全くなく、私達は一つ、同じであることに、やっと気付かせてもらいました。そんな心の中に、哀れみの心も入っていました。それからはともにともに帰ろうという気持ちで、いつも瞑想の時アマテラスに「ありがとう、ごめんね。」と今までのその思いの間違いに向けています。卑下する思いと己高い思いは紙一重にありました。又他力のとても強い思いがあります。そんな思いを供養していきます。

巫女の時の思いとアマテラスに対しての思いの間違いを、ともにともに温もりへ帰ろうと、母なる宇宙に帰ろうとやっていきます。田池留吉に出会わせて頂いたことと、今まで繋いでくれた母の思いにしっかり心を向けていきます。ありがとうございました。

18

私は巫女。巫女は私。

今世子供の頃から使ってきた思いのすべては巫女の時代に培ってきた心だと納得できる。

母に対して素直になれない。心に壁がある。母に捨てられたと思っている。（今世は捨てられていないのに。）

私は優秀だから手がかからない。手がかかる他の子供のために、私から平気でむしり取る。私を金づると思ってる。そんな思いが出てくる。

私はみんなのために色々なことをしてあげるのに、みんなは私に何もしてくれない。私は優秀だから、私は一人でできるから、私はよく気がつくから、してあげることばっかりで、私は何もしてもらえない。みんなに悪気はないのは分かってる。ただ気が利かないだけ。愚かなだけ。仮にしてもらっても、そんな程度では満足できない。

私が素晴らしくて、皆が愚かなのだ、と。

だいたいこんな思いで生きてきた。生きている。

そして根本的には誰も信用しない。表面上はとても人当たりがよく、いい人だと評価されているであろう私。

ああ、今の私のすべてが巫女だと思う。とても己が偉く、孤独で寂しい心を抱えてる。

七月の橿原セミナーの巫女の思いに向ける瞑想で、理不尽な仕打ちへの怒り呪い恨み憎しみのどろどろの塊で「お前らみんな死ねーーーー!!!」と叫んでいた。

そんな私だから今世生まれてきた。生んでもらった。苦しくてたまらないから、どうしてもそれを何とかしたくて、必死の思いで生まれてきた。田池留吉に会いにきた。

学びに出会えてよかった。田池留吉に出会えてよかった。学びができることがたまらなく嬉しい。自分を救っていける。巫女の私が愛しいと思う。

苦しかった。苦しくてたまらなかった。帰りたかった。帰りたくてたまらなかった。帰れる。帰れる。帰ろう。帰ろう。巫女の私とともに、素直になって、愛へ帰ろう。

学びができる今が嬉しくてありがたい。

お母さん、生んでくれてありがとう！

今世ともに学んでくれてありがとう！

二五〇年後、必ずアルバートに会いに行きます。

19

橿原セミナーの現象で巫女に思いを向けた時、「狂ってきた。狂ってきました。」と叫びながらも転げまわり「苦しかった。苦しかった。この心隠してきた」と苦しくて転げまわりながらも心の中は喜んでいる。「やっと、やっと」という思いが溢れてくる。

小さいころから「なぜ生まれてきたのか。生きる意味は何なのか」とずっと疑問をもっていました。誰かのために行動して褒められて「良い子だね」と言われることが生まれてきた目的なのか。私には何かすることがあるはず、意味なく生まれるはずはない。

その思いが、仏壇の前で手を合わせている祖母の唱える般若心経を覚え「小さいのに偉いよ」と周囲に褒められることを好しとしたことをスタートに、祖母、母とともに幾重にも自分の外に心を向ける他力信仰にエネルギーを使い続けてきました。それでも生まれてきた目的が分からず、どこにいても満たされないと思っていた時、田池先生の講話を聴く機会がありました。田池先生のお話は私にとっては衝撃的でした。「他力信仰は間違っている。意識の世界が本当のあなたです。」という内容で、私の今まで信じてきたことを全否定されたのです。幼い頃より、神、仏を大事にして、一生懸命に母の思う良い子を演じてきたのに全部違うといっている。これから私は何を信じてどう生きていけばいいのか。一つひとつの行動が何を基準にすればいいのか分らなくなりました。

とにかく学ぼうと思ったのが二十四年前です。

学びながらも肉の現象を通して、アマテラスの思いそのままにしていることを感じずにはい

られませんでした。これでもかと凄まじいエネルギーを出し続けてきました。学び続けても何も分かっていない状態です。

だけど、学べることが嬉しい。自分の中に思いを向けられることが嬉しい。

巫女の思いに向けた時、狂い続けてきたことを感じた後、今までの肉での現象が、一つひとつ紐解けていくのを感じました。

私は四人姉妹の四女として生まれ、顔にあざがあり、いつも姉たちをみて「きれいだなあ」と思ってきました。それと同時に、私は皆と違う。私には何かもっと大事な理由があるという思いが強く出ました。あざがあるということで私は、選民意識をより強く持ち、どの人よりも自分を上に置きました。どんどん偉く聳え立ちました。

家は商売をしていて、たくさんの人が出入りし、仕事のトラブルはもちろん、家庭内での父、母、祖父、祖母のケンカは絶えず、子供ながらにそんな大人の様子をみて「どうすればうまくいくか」ということを考え、大人の行動すらも「もっと○○すればいいのに、そうすれば相手の人、気持ちよく動くのに」等々、黙って心の中で大人を批判していました。

自分の周囲の人、環境で出てくる思いの一つひとつが外に向けているものだった。それが、巫女の時の思いと繋がっているということが響いてきます。この巫女の思いと出会うための今までであった。こうして自分の中と出会うことが生まれてきた目的だったと心に響いてきます。嬉しい。嬉しい。

苦しかった思いが、みんな喜びに繋がっていく。ただただ嬉しい。

田池留吉に思いを向けると「ひとつ」と響いてくる。

自分の思い、人の思い、エネルギーと区別してきたことを感じます。間違ってきました。

巫女の思いが「ひとつ」と感じさせてくれる。やっと、学びの入り口に辿り着いた。そんな感覚があり、嬉しい。ただただ嬉しいです。ありがとうございます。

20

「清葉が見捨てた男なら、私が拾ってやろうじゃないか。」

子供の頃、母と見た新派でのセリフだった。それが正しいセリフかどうかわからないが、私はそう記憶している。（泉鏡花の原作には出てこないようだ。）そして、その言葉を言い換えるとそのまま私の思いとなる。

「神が見捨てた男（人間）なら、私が拾ってやろうじゃないか。」

神に成り代わる自分の思いを端的に言い表している。

今回の橿原セミナーでいつものようにアマテラスに向けるが、いつものように何も響いてこない。アマテラスは何も語らない。ずっとそう思っていた。ただ、何かを出していくしかないからあれこれ思いの向け先を探って、怒りや悲しみのエネルギーを出してきた。

友達と、「アマテラスは何も言わない、だから私たちが神に成り代わったのだ」と話をする。神の言葉を語れと言われたらそうする以外になかった。巫女として生き残るためにはそうするしかなかったのだと。

巫女として神の声を聞くためには心を揺らしてはならなかった。どんな時も微動だにしてはならなかった。心を完全に封じ込められたものだけが生き残れる世界、それが巫女の世界だった。周囲で泣き叫ぶ者がいようと、狂っていく者がいようと、たとえ隣で殺されていく者がい

太子町から竹内峠を越える道に入ります。

ようと心を動かしてはならなかった。そんな私たちにアマテラスの思いなど聞こえようはずがなかった。それを知ったのは今世、田池留吉氏によって心に温もりを蘇らせなければ真実は語れないということを教えてもらったからだった。

長い、長い、本当に長い間、神の言葉を語る者としての自分を守ってきたけれど、その実、神の声を聞くことなど一度としてありはしなかった。けれど、その座を降りることもできない。過去に「卑弥呼」と呼ばれ、崇め慕われ一族郎等を守ってきたという栄光の座を手放すことはできなかった。神が守ることも救うこともしないならば、自分が神に成り代わって人々を、一族を、家族を、守り救わなければならない。それを当然のこととして生きてきた。それは長い呪縛の日々だった。アマテラスを怨み呪い罵ることしかできない自分が、アマテラスに成り代わろうともがき苦しみながら理想を追い求め

創り上げた天照の国日本。今世、この国に生まれた意味にも納得がいった。

田池留吉氏の言葉はそんな私たちへの真の救いの言葉だった。人間の（肉の）理想の具現化こそが幸せの道だと信じて止むことのなかった無謀な進化。全く間違った道を突き進んできた人類の歩みを一八〇度転回するという、その指し示す方向にしか本当の幸せも喜びも存在しないのだという真実が初めて伝えられたのだ。今こうしてキーを叩きながらその難しさがひしひしと伝わってくる。それでも確かに私の心の世界に一筋の光がさしたことは間違いのないことだったのだと実感している。

卑弥呼の解放、そこから本当のアマテラスの思いへと続く扉が開かれるのだと伝わってくる。そして、そこに至る途上には天照の国日本の崩壊があるということも。

21

寂しかった、どうしようもなく寂しかった。冷たい、冷たい中で、どうしようもない、言葉では言い表せない寂しい中、冷たい中で祈るしかなかった。こんな心を抱えたままで、祈って、祭って、何とか己を高めようと、己の地位を築こうと、己の力を表そうと必死になって修行し、戦ってきた。もうそれは、本当に凄まじい思いを流しながら。比較競争の世界。まわりと己を比較する根深い心癖。今世もしっかりと巫女のこの思いを引きずっている私です。苦しいけれど、どうしようもなかった、どうしたらいいのかわからずにここまできた。

田池留吉を思うと、〝お母さん〟と思いがあがってくる。誰も巫女の心に「寂しかったね。苦しかったね。つらかったね。」と優しい思いを向けてあ

げられなかった。やっとやっと巫女の心に語り掛けてあげられる。まだまだ十分ではないけれど、やっと寂しい心に寄り添おうとできる今がある。うれしい、本当にうれしいと感じました。

22

何度生まれても、何度死んでも、転生をどれだけ繰り返しても、私は巫女として生きました。その人生において、幸せだった時はなかったです。全部失敗。真っ黒の上塗りをして、どうしようもない自分を助長してきました。日本でも、他の国でも、常に同じ心を使ってきました。

今世、チャネラーとなり心を少しでも開いたのは、そんな苦しみの自分を救うためでした。何年も何年も過去世の自分の心を聞きました。苦しみと恨みと呪いの中で死んでいった自分。チャネラーとしての自分を大きく前に出して、崇め奉られることを願い、最期は常に同じでした。

石もて投げられて、死んで行く自分。最期は絶望だけ。己を表し、苦しみだけで死ぬ自分。同じことを繰り返してきました。真っ黒の宇宙しか知らなかった。真っ黒の壁を自分の周りに作り、決して人を信じず、我さえも信じず、すべてを足蹴にして捨ててきました。そんな自分が、苦しみを語ってきました。どれだけ苦しかったか。死ぬしかなかった自分の過去世。最期はいつも自死しかなかった。人を恨み、憎み、呪ってきた自分。そして自分さえ抹殺しなければならなかった心。そんな自分が今世、初めて普通に生きられました。田池留吉と出会い、初めて人を信じていいんだと教えていただき、自分は肉じゃないと分かった。肉の自分は真っ黒しかない自分。

でも、反省を通して垣間見えた、本当の自分

の優しさに驚いたのです。

反省のあと、心を開いて初めて見えた本当の自分は、どこまでも優しい自分でした。その自分こそ田池留吉なんだと心で知りました。「私は愛でした」そう思います。過去世で数えきれないくらいやってきた巫女(みこ)は、今世を境にもう終わります。今世は方向転換させていただけたのです。田池留吉に出会えたことは奇跡です。でも、私は強く強く望んで生まれてきました。

必ず出会うと、真実に出会うと望んで生まれてきたのです。まだまだ先は長いです。でも、この道しかないことを、知っています。巫女だった過去世は、今応援してくれています。今世も、やっぱり自死を願ってきた私だったけど、過去世も応援に回ってくれてともにともにと願ってくれています。

初めて普通の人として生きられた今世、哀(かな)しかった過去もみんな変わってきています。ありがとうございます。これから、私はこの道をともに歩いていきます。田池留吉、ありがとうございました。巫女として苦しみの中に生きた過去世の私も今、喜んでおります。愛しかなかった、その中で自分が作った闇の中で蠢(うごめ)いてきただけだった。気付かせてくださってありがとうございます。私は愛でした。そう、喜びで叫ぶ過去世とともに、これからも学んで参ります。

23

語ってください。過去、現在、そして未来へと継(つ)ぐあなたの心の中を、語ってくださいと語ってきました。

過去、そして今も使っている心、昔々から使ってきた心、その心を語ってくださいと伝わって、私の心を揺さぶります。

見たくない、語りたくない、忌まわしい過去、そう思い込んできた私に、その思いは優しく優しくいざないを促して、私の心を揺さぶります。

感じた思いのまま、嬉しい思いのまま、この手を動かしていきます。

過去の私は、今の私、そして、未来へと繋がっていく心、そういう思いをずっとずっと見ないようにしてきた過去、そして来世の私が語ります。今の私の中にある巫女の思い、その思いを供養してください、いえ、ともに、という思いを向け続けてください。

私の中の巫女、語ってください。

私は何をさて置いても、己一番の心を膨らまし続けてきました。いえ、その心しか知らなかったのです。

幼かった私の心は素直に神という存在を信じてきました。

苦しい修行にも耐えて、私が一番の巫女になるのだと、母を恋い慕う思いを隠しながら、私は捨てられた、捨てたその母にも見返してやると、憎しみという形でしか表現できなかった恋い慕う思いが、だからこそ、その憎しみを、憎しみという形をバネとして、どんな修行にも耐え抜いてこれたのです。

修行よりも厳しいもの、それが同じように連れてこられた子供の間に起こりました。心を許せた相手はいませんでした。許したら最後、食われてしまいます。食うか食われるか、絶えず周りをうかがいながら、利用できるものはすべて利用して、己というものを掲げ、神の声を聞くための訓練、修行に励みました。

信じるものは自分が出すお告げだけ、そのお告げによって、自分の地位が上がり、信頼されていくことにより、己の地位を高めていく、そんな競争の世界に身を置いて、なお、自分を高めていくことだけが自分の命を繋ぐことを、本当に強いられて生き抜いてきましたが、その思いが間違っているなんてことにも気付けませんでした。

母を恋い慕う思いを捨て去り、神の声を聞く者、ここに我ありと君臨してきた己という存在が、間違っているなんてことが、間違っているなんていうことをなかなか信じていくことができませんでしたが、間違ってきたのかなあと、間違ってきたかもしれないと思うと、心の中がほんのりと温かくなるのです。これはいったい何でしょうか。温かくて、温かくて、また嬉しくて、涙が出るのです。

語ってくださいと伝わってきました。あなたの巫女の思いを語ってくださいと伝わって、伝わる思いのままに語ってきました。今も同じ思いを使っています。今もそして、未来においてもこの心を使ってきたのですね。そう思いを広げていくと、どんどんどんどん語る思いは温かくなる、温かくて嬉しくて、ああ、ああ、これが母の思いですか？ 私が捨ててきたお母さんの思いは、捨て去ってもなお、私の心の奥底から温かい思いとなって湧き出てきました。ああ、これが本当のお母さんの思いですか。お母さんの思いを忘れて生きてきた私の心にも、お母さんの思いはあったんですね。あったんですね。語ってくださいといういざないを受けて語りました。ありがとうございました。

◇

早朝の散歩で森林の中を歩きました。森林の中を歩くことが、巫女の思いを出すようになってから、怖くなりました。

怖い、怖いと思いながらも、その道を歩きます。迂回する道はたくさんあるし、わざわざ空高くそびえる大木の間を歩く必要もないのに、気付けばその下を通り、木々の間からのぞく空を見上げて、異語を発しています。異語を発して、また嬉しくなって異語を発する、そういうことでしたが、今朝は違いました。

突然でした。突然、私は間違った神を唱えてきた、唱えるばかりか、神を間違えてきたことにも気付かずに、その神のお告げと称して、たくさんの予言をし、たくさんの人を惑わしてきた大馬鹿者だったという思いが、突然、何の前触れもなく心から上がってきました。

ああ、本当だった、本当だったんだ。田池留吉の肉を通して、「みなさんは、間違った神を人々に伝えてきたという大罪を犯してきた」と、言われても、なかなか分からなかったけれど、ああ、あ、本当だった、本当に、本当に、本当に、取り返しのつかない大罪を犯してきた、ただただその言葉が、その思いが溢れてきたけれど、以前のように、その自分を責める思いはありませんでした。責めるというよりも、そのことがどれだけのことだったのかという思いの方が強かった。

私は間違ってきた、間違った神を伝えてきた。その予言、お告げというありもしない神の言葉を人々に伝え、その上にあぐらをかいて、君臨してきた大馬鹿者だった、今もまたその心を使ってきたのかという思いは、巫女の時の思いとともに、ともに帰ろうのいざないという思いになります。

待ってもらってきた、目覚めてくださいと、愛、あなたは愛ですと、何度も何度も何度も促(うなが)してくれていたものに、出会ってくださいと、いつもいつも心の中からそう言ってもらっていた私達だったのだと、たくさんの過ち(あやま)を繰(く)り返してきたけれど、過ちの連続だったけれど、間違った神を伝えてきたという大罪には及びもしなかった。どれだけのことをしてきても、どれだけ間違ってきていても、ただ待っていてくれていた真実を心で知っていく二五〇年三〇〇年です。

巫女(みこ)の思いを語りました、巫女の時の思いを語りました。そしてやっとそのことを通して、私は私に何を伝えたかったのかを知ることができました。

間違った神の存在を伝え、その教えに従いなさいと人々を先導してきた。それがどれほども悪いとは思えなかった私の心に今は、温かな思い、間違ってきたことを認めていくだけで、またひとつ心が広がっていく、そんな不思議な体験を通して、自分の中には真実があるのだということを確信していくことが待たれていました。これからです。

やっとこれだとの確信を心で感じ、あとは、己一番、我は神なりの思いを供養していくこと、ただただ田池留吉、アルバートを思う、呼ぶ、そのことを自分に課していきます。ありがとうございました。

24

今回の七月橿原セミナー参加後にやっと巫女の思いを見てみようと思いました。

以前は巫女の思いは瞑想では何となく苦しくて暗いなぁと思う程度であまりピンとこない感

じで真っ直ぐに見れずというか見ていませんでした。まだ、見たくないと思う気持ちが強い状態でした。

巫女の瞑想では神に仕えしもの、神の声を聞くものこそ素晴らしい、この心この思いがあることを知りながら心を見ることから逃げてきました。この真っ暗な思い苦しい思いを今世も見ずに閉じていこうとしていました。

私はみんなとは違う神の声を聞くために生まれて死ぬこれが私の人生。私のするべきことは私を封じ込めて押し殺し、神と一体化すること。そのためには自分をなくてしまえば良い。

ニセモノの自分をどんどんと膨らませて膨らませて私こそ神、神の声を聞くものこそ本当の私、我は神なりとブラックの神を膨らませていきました。

自分の命と引き換えにしてすべてを神に仕え狂いに狂って間違ったブラックの私を作り上げて愚かなことをして参りました。どんな苦しみもたえしのぎ、狂いに狂っても神のみぞすべてと神を信じ切って神との一体化を成し遂げることだけが私の仕事でした。本当に愚かな私でした。

本当の私を封じ込め押し殺し、私のことを私は忘れさり切り捨て、これこそが私なんだと信じ込み、本当の私とはどんな私だったのか長い間思い出すことすらできない今世までした。

苦しく辛く寂しい真っ暗な私でした。

しっかりと巫女の私が心に残って今世も引きずっていました。間違って参りました。すべて間違って参りました。本当の自分を切り捨て、なくして、ニセモノの神にすがりつき、何も素晴らしいことはありませんでした。存在しない神を信じブラックの思いを垂れ流し汚しに汚して参りました。

この巫女の心とともに本当の自分を思い、ふ

二上山雄岳の山頂には大津皇子が葬られていると言います。ちゃんと墓だってあるのですが、ここではなく、二上山の麓にある鳥谷塚古墳がそうではないかという考えもあります。

根拠はありませんが、僕もそう思っています。二つの陵墓の前に立ってみてそう感じる、そうとしか言いようがないのですが……。

大津は、元からここに葬られたのではなく、藤原京の薬師寺近くに葬られ、祟りを畏れて二上山に改葬されたのだと言います。現に大津の刑死後、半年して皇位継承者の草壁皇子が急逝しています。まだ二人の父、天武天皇の喪もあけていないというのに……。

そういえば薬師寺自体が、大津皇子の怨霊を鎮めるために創建されたというのです。推測でしかありませんが、藤原京が捨てられたのも、大津皇子の怨霊と関係があるかも知れません。この頃、仏教がすでに入っており、巫女の巫術と同時に、仏教の加持祈祷の力が崇拝されるようになっています。大津皇子の怨霊封じも、仏教と神道が競い合うようにして行われたのかもしれません。

うつそみのくやる
我や明日よりは
二上山を弟せと
我し見むかも
大伯皇女

鳥谷口古墳

るさとへ一緒に帰ろうと伝えられる今が嬉しい幸せです。心の中はありがとうありがとうで埋め尽くしていきます。

25

二上山に思うこと

二上山の観える住宅地に引っ越してきて、四十年程経つかしら。毎日この山を見ない日はありませんでした。

ある時主人が先生に質問をしました。「ここに引っ越してきた訳がありますか」と。先生は即座に「はい」と、その一言でした。まだ学びを知って、田池先生を知って間もない頃でした。

私達はここに引っ越してきたのは、ほんの偶然くらいにしか受け止めていませんでした。しかし先生の答えは単純なものでした。偶然はなく流れのままに乗ってきた私達の計画そのものと、受け止めたほうが良いと今頃になって分かるのです。

当時の私達は、巫女の思いに触れることもなく、巫女の

壮絶なる人生を心に知る機会も持たず、三十数年の時を送ってきました。

ようやく、巫女の思いに触れる時をいただき、私の思いに触れる機会をセミナー会場や、現在、引っ越してきた伊勢の地で学ぶ時間を頂き、私の巫女への思いを感じる機会をいただきました。

橿原セミナーに向かう車窓から、以前の我が家の窓から見ていた二上山の形とは逆になる風景を、以前の家族との時間をゆっくり思い出しながら楽しんでいたのですが、「寂しい、寂しい、迎えに来て、お母さん迎えに来て！ 寂しい寂しい」の思いが強く強く湧き出てきました。

セミナー会場での1、2、アマテラスの時間も寂しい寂しいの思いだけがせり上がり、叫びました、心の底から母を呼びました。

学びに触れながらも、己偉しの臭いが抜け切らないまま、勝手気ままに生きてきて、心を見ることを疎かにしてきた私だから、苦しい底からの声に辿り着くまでに時間が掛かりました。

底の底の底は寂しいだけでした。母に捨てられたと思って

きました。貧しい農家に生まれ、食い扶持を減らす意味もあったのだろうか、母に連れられて巫女の道場に来たのは。去って行く母の後姿を見ながら、何と冷たい人かと、恨み、憎み、この思いは骨髄まで染み渡っていました。

ただただ、この辛い修行を乗り越えて、私を馬鹿にしたお前達を乗り越えてやるぞ！その一念でした。

橿原セミナーを終え、自宅で再びこの思いに向かった時、私の心に少しの変化がありました。何も何も偶然はない、この思いに出会いたいがために、住まいを変え、出会うべく人々と出会ったのだと、納得でした。そして、今日まで、しまい込んできた思いが深く深くあることを知る機会が今ここにある。苦しみと出会い、喜び、嬉しさと出会っていく過程が嬉しいと思えました。

田池留吉の世界はマイナスがありません。マイナスと思う思いが私の心の中にあるだけ。その思いに触れるだけで、どんどん軽くなる、出会ったことが嬉しくなる、存在してきた思いが嬉しくなる、そして、優しい自分と出会えてくる。

田池留吉の世界が嬉しい、田池留吉の深い深い愛の中にあるからこそ感じるこの思い。ありがとうの言葉しか出てきませんでした。

26

巫女に思いを向けてみた。子供の時、ある宗教団体に、小学生だけ土曜、日曜日の一泊二日で修行するのがあった。それに私は三年間参加した。その時の光景が思い出された。

他力の反省の時、真っ先に思い出す場所であった。あの場所では孤独だった。同年代の子供たちが楽しくワイワイやっている。それを遠目で寂しく眺めていた。自分から中に入れなかった

し、誰も声をかけてくれなかった。寂しくて寂しくてトイレに駆け込んでは、「お母さん、お母さん」と泣いていた。夜になると寂しさが一層強まり、いつまでたっても眠れなかった。挙句の果てはしくしくと泣き出し、係の人に迷惑をかけていた。こんなに寂しく辛いのに、私は皆とは違う、ワイワイと楽しくなんかできるものか。私は特別、私は特別。

そしてどんなに辛くても、私は行かなくてはならないと思っていた。四人姉妹で、私と姉が参加した。姉は一年で辞めたが私はそのあとも二年間通った。妹たちも一緒に来てくれると思っていたのに、結局一人で通うことになった。

あの時なぜ、「もう行きたくない、辞めたい」と言えなかったのか。学校との友達とも遊べず、孤独な思いを抱えながら、なぜ行ったのだろうか。

お母さんに辞めたいと言わなかった。自分の任務を投げ出せない。お母さんを救ってあげるのだ。私の中で、自分が人身御供になったかのような気持だった。私が行くことにより、みんなが幸せになれる。私さえ私さえ我慢すれば……。

それはお母さんの為、家族の為なのだ。そう思っていた。

でも本当は、怖かった。辞めるのが怖かった。苦労することにより手に入れられるものがある。今までこんなに我慢している。こんな苦労をしている。姉妹の誰よりも、同級生の誰よりも私は苦労をしている。だからその分、幸せを手に入れるのだ。途中で辞めたらすべてなくなってしまう。私は誰よりも幸せになることができるのだ。

「若い時に買ってでも苦労しろ」お母さんの口癖だった。

そうしたら、人よりも幸せを手に入れられる。だから一人でいいのだ。寂しくてもいいのだ。皆に幸せなんか分けるものか。独り占めしてや

る。どんどん、どんどん叫びが出てくる。誰にも渡すものか、我が一番、我こそは選ばれしもの。負けるものか、誰にも負けるものか、守ってやる、守ってやる。この陣地に入るものすべて皆殺しだ、殺せ！殺せ！殺せ！

どんどんどんどん叫びが出てくる。

私は愚かだった。私は何も分かっていなかった。その思いとともに叫びが出てくる。

今までお母さんに行かされた。私は嫌だったのにお母さんに行かされた。

友達もよう作らない嫌な性格を、あの時に形成されたのだ。全部、全部お母さんが悪いのだ。

そうやってお母さんを恨(うら)んできたけれど、今回、巫女(みこ)に思いを向けた時、そうだ私はこの思いに出会いたくて自分で計画してきたのだと初めて思えた。自分を救う為だったのだ。そう思えたことが嬉しかった。

巫女とともに、アマテラスとともに愛に帰る道を歩いて行けるのだ。そう思えたのが嬉しかった。

27

巫女と思うと真っ先に出てくるのは、寂しくて苦しくて辛(つら)く悲しかったという思いです。同時に、我を見よ、我に従え、我一番のその力を誇示(こじ)する思いです。そしてそれはまた今世の母に使ってきた心でした。

母に素直に甘えることができなかった。

この学びをしてからも巫女の時の思いをたくさん出してきました。知識としての学びはたくさんしましたが、心でわからなかった。今やっとお母さんと素直に思えます。母の思いを感じることができるようになりました。

暗く苦しかった思いを優しいお母さんの中に

抱いてあげられることを知りました。
うれしいです。心の向け先を教えていただいたこと、大切に自分の中で育(はぐく)んでいきたいと思います。ありがとうございます。

28

私は寂しい思いを抱(かか)えてきました、物があっても、誰かがいてもいつも寂しかったです。満たされることがなかったです。それでも貪欲(どんよく)に求めてきました。自分の寂しさを満たしてくれる物を自分の外に求めてきました。寂しい心を癒(いや)してほしい、この寂しさから自分を救ってほしい。寂しかった、寂しかった、寂しかったです。他力の神々を求めてきました、パワーを求めてきました。我のパワーですべてを牛耳(ぎゅうじ)れば幸せになれると信じてきました。この世を支配、人々を支配するパワーを外に求めてきました。本当に愚かでした、無知でした。地獄の底の底のずっと底から「今世こそは」の思いで産んでいただきました。お母さんに産んでいただきました。私の思いを受け入れてくれました。だから私は今最高に幸せです。本当に信じられないことでした。この思いとともに愛に帰ることを伝えていただき本当に嬉しいです。私はこの寂しい思いを本当に嫌ってきました。押し込めてきました。逃げてきました。間違ってきました。自分に冷たかったです。なかなかこの思いを愛(いと)しいと思えないですが、少しずつ少しずつ伝えていきます。ずっと待っていてくれた自分の思いですから。ともに帰ります、必ず帰ります。ありがとう、ごめん、ありがとう。
巫女の心はずっと伝えてくれていました、ともに帰りたい、ともに帰ろうと。

29

私にはチャネリングをする、そんな能力はなかった。だから、自分が素晴らしいと思う相手の心を読もうとした。

その人がその事柄について、どう思っているのか、それをわかろうとした。その事柄から、自分を見つめることをしてこなかった。

自分の思いではなく、相手の思いの中で生きる。その内の一番を目指してきた。

素晴らしい相手の上に立つことをよし、としてきた。やっぱり、金に繋がっていく気がする。素晴らしいと思われることで、金を手にすることができる。相手から金を吸い上げることができる。それにはやっぱり、パワーが必要だった。そんなパワー、何の役にも立たないけれど、そんなことを目の当たりに突きつけられる現実を見せられても、私はパワーを必要とした。

幸せがわからなかったから、なにをどうして生きていけばいいのかわからなかったから、生きるんだったら、どうせ生きていくんだったら、そんな思いだったような気もする。

もっともっと上を目指せるパワーを必要とした。私は肉の自由を手にしたかった。これもできるぞ、あれもできるぞ。相手を神を怒らせないように。それは自分の欲の為。その神の内での自由。本当の自由ではなかった。

寂しくて、辛くて、苦しくて、ひとりぼっちで、どうしようもなくて、どうしようもできない幼い私には、パワーを求めるしかなかった。

暗い自分を殺すことしかできなかった人生。その現実を知りました。

30

巫女として生きてきた

学び始めて最初の頃に拝み屋さんと言われ、「なぜ私が拝み屋さんなのか」と反発の思いを出し続けてきました。その思いの底に見たくない思いがあることに気付いていませんでしたが、それでも学んでいくうちに、この思いがそうだったのかと思うようになってきました。修正の課題はここにあると思ってきました。

橿原で巫女の思いを引きずったまま今世を迎えた私達だったというメッセージを聞いて、拝み屋として生きてきた思いと繋がっていると感じました。

巫女と思いを向けると寂しい、お母さんを捨てたから帰るところはないと思いが伝わってきます。裏切った私は許されるはずはないと思い

続けてきました。
ここから出られるはずはない、それならばとことん悪になってやる、でも本当は帰りたいよ、お母さんの中に、あの温かいぬくもりの中に帰りたいです。
切ない思いが届いてくるようになりました。帰れるよ、田池留吉に出会ったよ、帰っておいでって待ってくれているよ、と語りかけます。
引きずり落とすドロドロの中にある心を抱(かか)えながら、その思いを聞きながらどうしてあげればいいのか分かりませんでした。そんな自分の心を感じていたから、優しさを愛を求め続けて、裏切り、裏切られ、自滅していくしかありませんでした。
今、私はその自分に伝えられるようになってきました。それがうれしいです。
容易(たやす)く修正はできないかもしれないけど、道は見えてきました。捨てたはずのお母さんは待ってくれていることを信じられます。今世肉体をお母さんから頂いたことがその証(あかし)です。
そして田池留吉との出会いに繋(つな)がりました。それは拝(おが)み屋としての私があったからです。
間違ってきました、その言葉を簡単に言えない思いを流し続けていても、私は学びに繋がりました。繋がらせてもらいました。真っ黒な真っ暗なドロドロの中にある私を受け入れていくのがうれしいです。誰も信じられず、何も信じられなかったけど、私が私を信じていける喜びがあります。田池先生、塩川さん、セミナーの仲間、セミナーありがとうございます。

31

夢を見ました。
長い長い苦しい苦しい夢でした。

夜中隣に寝ていた娘が心配し思わず目を覚ましし、起こしてくれた程、突然うなされ苦しみだしたそうです。娘に声をかけられゆすぶられ夢から現実に戻ったとき、ああ、夢だったのか、と心底ほっとしたのを覚えています。

夢の中のことですので仔細は定かではありませんが耳に残っている言葉がありました。

「まだ巫女の心を使っているのか……」

永遠とも思えるほどの苦しさが何であったのか寝起きの朦朧とした頭ではなにも考えられませんでしたが、その文言だけはっきりと心に残っていました。

「死後の自分」

朝の光の中で瞑想していて浮かびあがってきた思いです。

ほんとの自分が今語りかけてくれた。

前へと……。

32

私が、この学びをしてから母の反省をしていく中で、一番強烈に母に対して恨みつらみ、呪いの思いを強く、深く大きくしていった出来事がありました。

それはとても強烈で衝撃的で許せないことでした。あの瞬間から私は変わったのだと思いました。あの瞬間、私は何かこう、とんでもない所というのか、違う世界に落ちてしまった、とても冷たい自分になってしまったような感じでした。

そのことがずっと、どういうこと

竹内街道が橿原に入る前にあるのが広陵町。
ここには葛城王家の故地であるばかりか、
天武天皇の皇子や皇女の墓も多く存在します。

か分かりませんでした。ずっと疑問でした。

その一つの出来事が、私が幼い時に死んでしまった父の葬儀のことでした。幼かった私は、父の死が受け入れられずに泣きじゃくっていたんです。そんな私を見つめるたくさんの人たちの、私を憐れんでいるその目に、私は屈辱感が出てきていたんです。

その瞬間、私は泣くのをやめました。一瞬で泣きやみました。そして、それっきり私は末っ子としてあんなに大切にされて、抱きしめられ愛しいと思ってくれていた父のことを、聞くことはしなかったです。私はそれ以来、泣くことができなくなりました。できないというよりも、泣いている自分を見られることが屈辱で、無様でみっともない自分を嫌ってきたんです。

だから泣くことができませんでした。そんな泣きたい自分を、ぐっとぐっと押し込んできたんです。閉じ込めて蓋をして、出てこれないようにしてきたんです。だから私は幼稚園に行っても泣きじゃくる子は大嫌いでした。

そんな私はとても冷たくて、笑えない暗い子でした。怒りっぽくて、きっと意地悪で嫌な子でした。

そしてもう一つの出来事は、それもとても衝撃的でした。私の父が死んで、しばらくしてからのことでした。

幼稚園の先生が私を迎えにきて、出かける用事のある母と別れ別れになるときまで、私は母と離れてしまうことが、何か不安で恐怖で泣きじゃくっていたんです。母と別れるその寸前まで泣きじゃくる私を突き放していくために、母は私のお尻を思いっきりつねりました。

その瞬間私は、全身に冷水を浴びせられたかのような衝撃を受けました。頭の先から足の先までです。衝撃でした。でも私は叫べませんでした。私の中は叫んでいました。ギャーという叫びです。まるで断末魔のような叫びです。それでも私は叫び声を出しませんでした。それほど私は自分というものを抑え込んでいたんです。今なら分かります。それがどれほど冷たいことか。それがどれほど自分に対して冷酷なことだったのか。今なら分かります。

そして私はその時も落ちていきました。真っ暗な中に。冷たい世界に落ちていきました。私はあの時、自分で自分を消しました。殺しました。閉じ込めました。メラメラと燃え上がる炎のような自分の思いを消しました。

それがどんなに自分にとって冷たいことか、冷酷無慈悲なことか今なら分かります。七月の橿原セミナーで巫女に思いを向ける瞑想がありました。その時、寂しい、寂しいと私の中から

今井町の町並み（橿原市）ここまで来れば橿原はすぐそこです。

出てきました。初めてでした。涙が出てきました。初めてそんな自分を愛しいと思いました。初めてでした。

小さい時から使ってきた、自分の中の巫女の思い、やっと認め、確認することができました。何も偶然でもなかった。すべての思いは巫女の思いでした。そしてそのことをお母さんが教えてくれていました。みんなが教えてくれていました。ありがとうございました。

33

己一番、我に従え、我を見よと、誰よりも誰よりも素晴らしく、そして、財力と権力を我が物にするために、自分以外は全部敵。生きるか死ぬか、殺すか、殺されるか。

そんな争い、闘いのエネルギーを垂れ流し続け、そして、どんなに苦しくても、辛くても、悲しくて、寂しくて、本当にどうしようもないむなしい心を抱えていても、それでも絶対に表には出さない、出してはいけないと、耐えて忍んで、絶対に弱音なんか吐くものか、吐いてたまるかと、頑張って頑張って、ただ頑張って、根性、根性、根性と根性を貫き通して、くそったれ、今に見ておれとやってきた。負けることは死ぬことだと。絶対に負けるもんか、負けてたまるか、絶対に勝つと。

なんでこんな目に遭わすと、母を恨み、憎み、呪って、呪って、お前なんかお前なんか死ね、死ね、死ねと殺して殺して殺しまくってきた。お前なんかの世話になるもんか、お前なんか母ではない、私は私の力で立派になってやる。心の中は寂しくて悲しくて泣き叫んでいるのに、その思いをグッと押さえ込んできた。苦しかっ

た、寂しかった、悲しくて、泣けて、泣けて、心の中は張り裂けそうだった。それでも、お母さんなんて呼ぶものか、絶対に呼ばないと、悪戦苦闘してきた。

我が子に対し、すべてに対し、悪臭とは全く反対の、肉の喜び幸せ、繁栄、立身出世……とそんなエネルギーを植え付けてきた。私の言うことを聞いていればすべてがうまくいく。だから言う通りにしなさい、しろと、すべてを支配し、牛耳ってきた。すべてを狂わせてきたのは、私の間違ったブラックのエネルギーでした。本当に間違ってきました。本当に大きな大きな間違いをすべてに押し付けてきた。私は田池留吉に真っ向から歯向かってきた罪悪人でした。自分自身にそして、すべてに心から懺悔の思いが溢れてきます。「ごめんなさい、ありがとう。」

今、こうして、すべてを許し、すべてを無条件で受け入れてもらって、お母さんに生んでいただきました。そして、こうして、お母さんの温もりの中で、自分の流し続けてきた間違いに凄まじいエネルギーをさらけ出して、自分の間違いに気付いていける喜び幸せの中にあります。嬉しいです。

今、すべてをさらけ出し、田池留吉に心の針を向けて合わせていけば、すべてが間違っていたんだ、お母さんは私に出てくるすべての思いは、あなたの中の暗い暗い過去からの苦しい苦しい、真っ黒なエネルギーがあなたの中にあることを知ってくださいと、巫女という環境を私にもたらせてくれた、喜びと温もりの優しい優しい波動でした。

すべてすべて、誰のせいでもない、全部全部自分の意識の世界を教えてくれていたものでし

た。自分の心をしっかりと見つめて、そして、間違い狂い続けてきた自分と出会って出会って、ともにともに歩いていけることがどれだけの喜び幸せかが分かります。過去、長い長い長い間、すべて土台を間違え本当の自分を捨て去って生きてきたんだから。マイナス、ブラックの自分は尽きることなく、溢(あふ)れ出てくるんだ、だから、その自分と出会って出会って、そして、ともにともに、愛、母なる宇宙へ帰っていく、こんな幸せ喜びはありません。

お母さん産んでくれてありがとう。私、生まれてきてよかった。田池留吉と出会い、真実を伝えていただいた私、これほどの喜び幸せはありません。ありがとう嬉しい。ただただ嬉しいです。田池留吉ありがとう。アルバートありがとう。アルバートとともに、ともに、愛、母なる宇宙へ帰ります。ありがとうございました。

34

目を閉じて自分の心の中を思います。

静かな中に巫女(みこ)を思いました。そして、今世だけの自分が使い続けてきたエネルギーを思った時に、一番にお母さんに対しての思いが飛び出してきました。

今世の母には思いきり私（巫女）の思いが鮮明に浮かび上がってきたのです。それと、どうしても出てくるのがアマテラスです。巫女もアマテラスにひれ伏(ふ)してきたんだ、その思いが私の今世そのまま生き続けてきたんだと強く思いました。

孤独、ひとりぼっち、誰も信じられない、信じてはならないと、私は私に言い続けてきたんだと、自分自身がとても惨(みじ)めで、小さく小さく自分を落とし込めてきた。

そんな自分が嫌だから、自分を大きく見せるために戦い続けてきました。私以外はすべてが敵なんです。絶対に心を許すな、どんなに仲良くなっても、心のどこかで心を全開できない思いをいつも感じていました。だからなのか、私には親友と名の付く友はいません。いや、作れなかったのです。寂しい思いがいっぱいあるのに、寂しいと言えないし、心の中は苦しかったはずです。母にも本当に心の中の思いを言っていなかった。

なんで、こんな思いが出るのか分からなかったが、全部、巫女の時に培った思いが、私の心の中に積もり積もって生きてきたんだとつくづく思えます。この心を見なさいと、私の中の本当の私（田池留吉の意識）が言い続けていてくれていたんだと、今なら思えます。

今、何をすべきなのかが鮮明に浮かび上がってきます。今を置いてはない、今この肉がある間にすべきこと、田池留吉、アルバートを思い、自分自身の供養、心を見ること、総力をあげてやるだけだと、私は私に言い続けて、ともに母なる宇宙に帰ろうといざなえるやさしい私になります。

もっともっと思いがあるのにと思いながらも出てこれない思いが、私の心の奥底にエネルギーが待ち続けてくれているのを感じられることが嬉しいです。喜びを、温もりを伝えていきます。

35

何も要らない。
何もなくていい。
争いも戦いも、何もない世界が恋しい。

苦しい苦しい。

重く切なく言葉にならない言葉にできないこの苦しさは、なぜ？
分からない分からない。
どんなに考えても分からない。
なぜ、なぜ苦しい。
この心は、なぜ？

どんなに切望しようが、叶わない。
取り繕い、虚勢を張って、生き続けることしかない。
正直に認めたら、即刻首刎ね。
誤魔化して取り繕って、虚勢を張って、生きる。

今世の幼い頃、母の傍から離され一人置かれると、周りの視線を強く意識した。
どう見られどう評価されるかと、己をさらされる恐怖が襲う。そんな状況に私を置く母への不平不満、憎しみ恨み呪いが浮上していた。

小学生時代、普段はとっても、勝気強気何でも一番一番、一番でなくても一番と、とっても活発な存在でした。
なのに手のひら返すように、発表係で出番待ち時間が迫れば迫るほどに、心臓が波打ち、途轍もない恐怖が襲い掛かり、壇上に上がると呼吸もできない程となる。
そんな自分をとても不思議に思っていた。
この心は、まさしく今世連れもってきた巫女、アマテラスの心だと納得です。

36

不安と恐怖と底知れぬ寂しさの中にありました。しかし自分の中からいろんな声が聞こえた。小さい時から、それが何であるか確かめる手立

てがなかった。手立てを考えるよりも、もし誰かに相談すれば、この子おかしなことを言う子だと精神病院に入れられると思って誰にも言い出せなかった。その心をずっと持ったまま大人になっていた。目に見えるもの、見えないもの、どちらも恐怖だった。この思いはどこからくるのかと思い悩んできました。母が亡くなった時も、肉では推し量れない世界があるのだ、その見えない宇宙の法を知りたい、基準を知りたいと思いました。分からないことが恐怖でした。いろんな過程を経て結婚して富田林に、そして河南町に住むことに、その間二上山はいつも眺めていました。丁度見えるところにあったんです。登ったこともありますし、主人の実家が近くにあり頻繁に近くをうろうろしていました。とある時、お友達に菜の花の花見物に奈良の藤原京の跡地へ連れて行ってもらった時、ふと遠くに見える村を見て、お母さんを思う、呼んでる自分を感じました。帰りたいけど帰れない身を寂しく思う自分を感じた現象でした。そんなことを思い起こさせてくれたのが七月の橿原セミナーでした。悲しく辛く寂しく、しかし神の声を聞けるあなたは偉い、素晴らしいと自らを奮い立たせるしか生きていく道はありませんでしたと言うことでした。本当にそのものだと思いました。

その思いが田池留吉に引き合わせてくれたと、重たく心に根付いていた思いが一斉に飛び出して互いに喜びを確かめ合っている、確かめ合える肉がある、こんな幸せの中に今私はいる。夢が現実に、もう何も求めなくていい、本当のことは、本当の優しさぬくもり喜びは自分の中にあったことを伝えてくれていたお母さん、田池留吉ありがとうございます。

37

ああ、思いを向けたくない。ああ、思い出したくない。辛くて辛くて、寂しくて……。お母さん、お母さーん、

お母さーーん。呼べども、叫べどもお母さんは来ない。お母さん、お母さん、お母さんに会いたいよぅー。泣いて、泣いて、泣き疲れて私の心はどんどん沈んでいきました。お母さんに捨てられた。私はお母さんに捨てられたんだ。悲しさ、寂しさ、虚無感がどっと重くかぶさってどんどん心は沈んでいきました。私にはお母さんなんか要らない。そうだ私は素晴らしいんだ。だからここに来たんだ。そうだ私には素晴らしい力があるんだ。お前なんかいなくても私は立派に生きてやる。恨みつらみの思いをいっぱい抱えて私は何度も、何度も転生しました。「末路は哀れ」今世セミナーに集い幾度となく耳にした言葉。聞きたくなかった。恐怖の思いがよみがえってくる。

「末路は哀れ」私の過去世はすべてそうだったんですね。受け入れたくなかった。認めたくなかった。でも今、少しだけ心が緩んだように思います。今世もその心をしっかりと掴んだままでは「末路は哀れ」。学びに出会った今世です。自分との約束をしっかりと果たして終わります。自分としっかりと語っていきます。

38

巫女の自分に思いを向けると、共通して伝わってくる思いがあります。

超己偉い心、寂しい心、誰も信じられない心、すべてに絶望し、挙句は己を抹殺する思いです。

巫女は、常に権謀術数の中にありました。望むと望まざるとにかかわらず、それはいつの時代も、どんな環境や地位であっても変わらない心でした。

ひとたび隙を見せれば、あっという間に寝首を掻かれる、生き馬の目を抜く以上の、どす黒いエネルギーにいつも支配されていました。

ひとたび巫女としてその世界に足を踏み入れれば、一時は蝶よ花よの我が世の春を謳歌できることがあっても、そんな時期はあっという間に過ぎ去り、およそこの世のものとは思えないおぞましい世界が待ち受けているだけでした。

そんなこと知る由もなく、母に連れられてこの世界に足を踏み入れました。ここならあなたはきっと幸せになれると、そう教え込まれて育てられました。

巫女になるための修業は、幼い子供には大変

祈りの館／内部は外の明かりがまったく入ってこない。ほとんど闇の中と言ってもよいわずかな灯りの中で、祈りの儀式は執り行われる。

な苦労でしたが、私は母に教えられたとおり、この世界できっと立派な巫女になってみせると息巻いて、言われたことはどんなことでも疑うことなくこなしてきたのでした。

巫女として認められ、時の権力者に寵愛されることが最終目標でした。それが叶わなければ、巫女の末路は哀れです。まだ若くて、お神楽が踊れる間はそれでもよかったのですが、時とともに疎ましがられ、行く当てもないのに、ただ年老いたということだけで放り出されるのが常でした。そんな事情がわかっているものは、自分から率先して巫女の座を降りました。そして巫女を教育する係へと収まれば御の字です。

うまく立ち回れない人もたくさん見てまいりました。できる人ほど、いったん落ち始めると大抵は狂ってしまうのです。やがて手が付けら

れなくなって、ボロ雑巾のように打ち棄てられるのです。その先は、およそ人間の所業とは思えない世界。そういう苦しみが堂々巡りする世界でした。

時と場所が変わって、修道女として修道院にいた時も全く同じでした。何とかうまく立ち回って、隙のある奴は徹底的に蹴落として、自分の地位と権力は守る。そして時の権力者に取り入って気に入られれば万歳。そうでなければ哀れそのもの。全くどこにも救いようがないばかりか、完全なる絶望を味わって最期は自死するしかなかったのでした。

帰りたい。帰りたい。お母さんのもとへ帰りたかった。お母さんに連れてこられたから頑張ったけれど、こんなところに私はいたくはなかった。ずっとずっと、この心を隠し通してきた。自分の心を自分に言うこともできなくなって、神の言葉を聞くことだけに専心した。それしか方法はなかった。

巫女には、本当は何の力もない。巫女をやっているとそのことが痛いほどわかってくる、だからますます神事に励んだ。神の御言葉、ご宣託が降りてきたと装った。憑りつかれたようになって、自分の意志ではないところからあふれてくる思いを言葉に換えて、時の権力者に伝え続けた。それが私の唯一生き延びる道でした。

今やっとこうして、言いたくても言い出せなかった思いに手が届く、この喜びをかみしめています。

39

橿原セミナーの二日目、現象の中で塩川さんの「みなさんどなたも巫女の時代を生き抜いてきたという転生があります。巫女の心を引きずったまま今世生まれてきて……」とそのコメントを耳にした時、私の中から喜びとも苦しみともつかない激しい思いが噴き上げてきました。

ああー、帰れる、帰れる、帰れるんだー。

長い年月心の中に閉じ込めてきた巫女の時代の苦しみが悲しみ、恨みつらみ、数々の思いが、温もりの波動に触れて凄まじいエネルギーとともに喜んで喜んで飛び出してきました。

老いさらばえしこの身、誰一人として振り返ってくれるものとてないこの醜い姿、ああー帰りたい帰りたい、ふるさと、あの島、母の待つ故郷へ。どれほど帰りたかったことか、苦しかった、悲しかったかー、お母さんー、お母さんーお母さんー。

薄れゆく意識の中で母を呼びながら、あの母の腕の中のあの温もりを思いながら一人寂しくその肉を終えた一人の巫女、かつて卑弥呼と呼ばれし巫女の成れの果てでございました。

ああー聞こえる聞こえる私を呼ぶ声が、なんと心地よいあの響き、卑弥呼様、卑弥呼さまー。私は卑弥呼、神の声を聞く者　我を見よ、我を称えよ、我に従え、我にひれ伏せー田池留吉を蔑ろに、心を見ることを知らず、己を知ることもなく、奢りに奢ったこの心の果てに自らを真っ暗闇に中に突き落としてきた者でございます。今世こうして再び肉を持ち、温もりの波動に触れ、喜びの中に今こうして語らせていただけますこと、ただただありがたく感謝でございます。

やっと、やっと、やっとでございました。真実の波動の世界に背を向けて生き続けてきた私の心に「ともに帰ろう、ともに帰ろう」と優しい波動が伝わってきます、ふるさとへ、愛へ愛へ帰ろうとのいざないが……。ありがとうございます、ありがとうございます。この喜びを糧に、今世再びこうして肉持って田池留吉の波動の中で学ばせていただけるこの今という時を大切にふるさとへ愛へ帰る道筋を目指して、ただただ真っ直ぐ歩いてまいります。ありがとうございました。

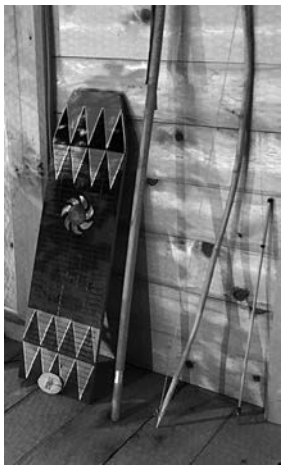
40

二年前の『卑弥呼　悲哀から目覚めへ』の原稿募集の際に反省を送ったときは、自分はまだ嵐の中にいるような感じでした。

よって、「巫女の時使った思い」が日常のはしばしに出ていることにも気付かず、ただ巫女に対して「おぞましい、見たくない、今の自分とは違う、過去に巫女をやっていたとしてもなんと愚かなことをやってきたのだろう」等の否定的な思いで見ていました。

その後、桐生さんと一緒に佐賀の吉野ケ里遺跡に行くことができ、そこでリアルに「巫女として生きた人生、狂って死んだ人生があった」と感じることができましたが、「本当に私は狂い死にしたんだ」と思えたのは、先日、七月の櫃原セミナーから帰った後でした。

その間にも職場で、巫女の時に使った思いはたくさん出ていました。比較、競争、足の引っ張り合い、陰口、いじめ、権力闘争等々、陰湿な出来事の数々に「もういやだ」と叫んでる自分がいました。やっと気付けたことがうれしかったです。それまで「いやだ」とさえ言えなかった。苦しくても、その思いを押し込めて我慢して、



畿内を中心とした官道の話題から外れますが、佐賀の吉野ヶ里遺跡の写真です。巫女の託宣を待つ大王と一族の様子。巫女をトランス状態にに導くべく琴を奏でる人、巫女の託宣を判断する審神者、巫女の補助の女性たちが再現されています。楯も弓も琴も、祭具として、打ち、鳴らすことで神がかりに導きます。

「いつかお前の上に立ってやる、出し抜いてやる、今に見ていろ」と修行して修行して、狂って死んでも修行し続けてきた自分、そして、アマテラスを神と思い、神を求め続けてきた自分に出会うことができました。そんな哀れな自分に、「ともにともに愛に帰ろう」と呼びかけられる今がうれしいです。

41

今世児童虐待のニュースを見ると心が苦しくなりその事件からなかなか心を離すことができないのはなぜだろうと自分に問いかけてみた。するとお母さんは私のことを助けてくれなかった。見殺しにした。許せないという思いが出てくる。

その思いは私が巫女の時に使った使ってきた思いだということを感じる。

母に使った思い。それは言葉にできないほどの悔しい、悲しい、憎い、そんな思いしか出てこない。なぜ私はこんな環境に生まれたんだと母を呪い責め裁いたその思いは今世私が難病になったときに使った思いそのものだった。

私のするべきことは一つの病を通して真剣に心を見ていく。特に母親に対する思いを見ていく。肉体細胞の現象から巫女の時の思いを振り返るということだと感じられたことが嬉しいと思った。

また巫女の時に使った思いは母に対する思いの他に、私はこの指導者の片腕となって自分を表していきたい。それにはパワーが必要だった。誰よりも誰よりもすごいパワーを身につけ片腕となって生きていきたいという思いも出てくる。それも今世ある教祖に使った思いだ。この人に

認められたい。認められるには摩訶不思議なパワーがほしい。周囲の人をひきずり落としてでも自分を認めさせていく。

本当にそんな思いを野放しにしてのうのうと生きている冷たい自分をいま感じている。このままでいいはずがない。本当に自分に甘かったと痛感しています。

42

毎日の生活の中で、暗く、重い、いつも、追い詰められているような、噴き出してくる、抱えきれない思いを感じています。

このテーマを見て、香世さんのメッセージを読んだ時、確かにこのような心をいっぱい使って、私は日々の生活をしています。

見て見ぬふりをしていますので、何度も何度も、同じシーンに出くわすんだと、改めて気付かせてもらいました。

本当に、すさまじい心、破壊するエネルギー、思い通りにならない時、思い通りにしようとするとき、闘って、闘って……、いつも掃除機をかけるとき、物を壊していました。掃除機に向ける思い、こんな日常です。心の中は、すべてを破壊するエネルギーを自分の宇宙に垂れ流していました。いかにも、分かっている、分かっているけど、やめられない状態を私は繰り返しています。

悔しくて、悔しくて、見下げられた、見下げる、見下す、見上げる。歯がゆい、歯がゆい、肉では、頭では、分かっているとはっきりしていることなのに、心は、分かってない、訴えている。訴えてくる、と思っていました。この思いを受け止める。自分に訴えてくる思いと、真向かい

になるってこういうことなのかな。いつも、肉の自分が上。肉の自分が基準です。基準でした。いくら言われても、苦しい自分が間違っていると、言われても……。一人で相撲していた。

巫女、巫女、巫女、私の中の巫女、巫女、特別な思いがありました。認められたい特別な思いがありました。本当に苦しい、苦しい思い、苦しいと言えない苦しい思いを、見つめる必要がありました。ありがとう。ごめんね、受け入れることができませんでした。けれど、今、出てきてくれてありがとう、と思う私がいます。

認めてくれ、認めろ、この私を、認めろ認めてくれー。間違っていました、間違っていたんや、前回、巫女の頃に使っていたをテーマに、お母さんと別れ、寂しいだけだった思いは、恨み辛み苦しみは、認めてほしい、認めろ……何とかして、何としても何とかしようとする思いは、すべて狂気に満ちた、狂いに狂った私でした。

瀬戸際、自分の中で瀬戸際、こういう時に、使うのか？1、2、3の現象で呼んでも、叫んでも誰も来ないことを感じました。巫女、たくさんの私の中の巫女とともに、お母さんの温もり、田池留吉を思う、愛へ帰ろう、ともにともに……、浅いところでもたもたしている自分に、このような機会をありがとうございました。

43

「我一番、我を敬え、我を認めよ、我こそ素晴らしき者。助けてあげましょう、救ってあげましょう。」アマテラスの声を聞き、神の言葉と己を表してきた巫女。そう、巫女の時ですね。この心を心に刻み生まれてきたことを知りました。私の中の巫女、卑弥呼、アマテラス。自分以外はすべて敵。自分さえも信じられず、苦しく寂

しい孤独の中の孤独を味わい尽くし、気が遠くなるほど暗黒の宇宙に狂い続けてきた心の記憶。母を憎み、母を捨て、己を奮い立たせてきた心の記憶。幸せになる為なら何でもしてきた。巫女の時代に培ってきたしたたかさ。決して本心を語らず、相手の心を読み取り、崇め奉り操ってきた心癖。すべて己を守る思いとして身につけてきたものでした。パワーを求め、ここに我ありとすべての者に知らしめ、すべてを支配し、すべての頂点に立つ野望は尽きませんでした。

母の温もりを捨て去り、忘れ去った心で神を求め、神に成り代わり、神の声と己を表してきた。間違った神を伝えたとの思いはなく、助けてあげましょう、救ってあげましょうと己を前に突き出し、己の肉の思いさえ利用していると気付けなかった。その代償を嫌というほど味わってきました。

何故、何故、何故。そのエネルギーを我が物にと自分で求めておきながら、神を呪い、恐怖し、暗黒の宇宙に落ちてきた心の背景が、今世の肉に願いをかけて繋いでくれた切なる思いとして心に響いてきます。ありがとうございます。私は大悪党。地獄に落ちて然るべしでした。

気付かせていただきました。やっと、やっと苦しかった自分にお母さんの思いが微かに伝わってきます。間違ってきました。私はその私と帰ります。田池留吉を思いなさいと伝えていただきました。嬉しかったです。お母さんと思うことを知りました。嬉しいです。私の中のアマテラス。暗黒の宇宙から母なる宇宙へ必ず、必ず帰ります。みんなとともにみんなとともに帰ります。

いよいよ橿原に到着です。

この地はお馴染みの橿原セミナーの開催地ですが、飛鳥の時代には、飛鳥への最終の入り口として賑わっておりました。

ロイヤルホテル近くの「丈六」の交差点、ここには高札場が設けられ、役人が常駐して文字の読めない庶民に、朝廷の通達事項を解説する場でもありました。

すぐ近くには迎賓館が建てられ、中国や韓国からの使節が宿泊し、飛鳥宮での謁見準備が整うのを待って飛鳥入りを果たす最終拠点でもあったのです。

特筆すべきは、飛鳥への途上に多くの天皇や皇族の古墳が造営されましたが、右の写真に見られるように、「欽明」→「敏達」→「敏達の子の押坂彦人」→「欽明の第四皇子・用明」→「用明の妻・推古」と、橿原から大阪の太子町にかけて継体王朝の初期、そして蘇我系皇族の古墳が並ぶことになります。

特に巫女のトップであり、仏教派でもある推古女帝の古墳は、いったん橿原に造営され、そのあと、息子の竹田皇子と太子町に合葬されています。

推古天皇陵 (奈良県橿原)

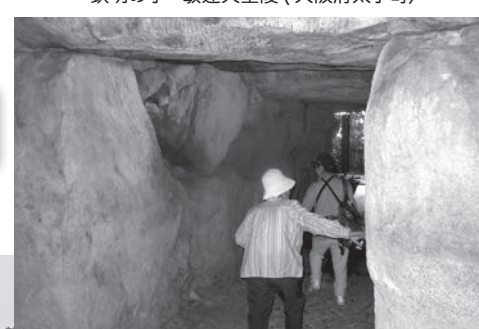
推古天皇陵（大阪府太子町）

見瀬丸山古墳（橿原市）欽明天皇陵の可能性

欽明の子・敏達天皇陵 (大阪府太子町)

橿原市⇔広陵町⇔太子町

欽明の第四皇子・用明天皇陵（大阪府太子町）



敏達天皇の子・押坂彦人の古墳（奈良県広陵町）

藤原京の跡です。藤原京には薬師寺が建てられました。大津皇子の墓は二上山に移される前は、この薬師寺にあったそうです。

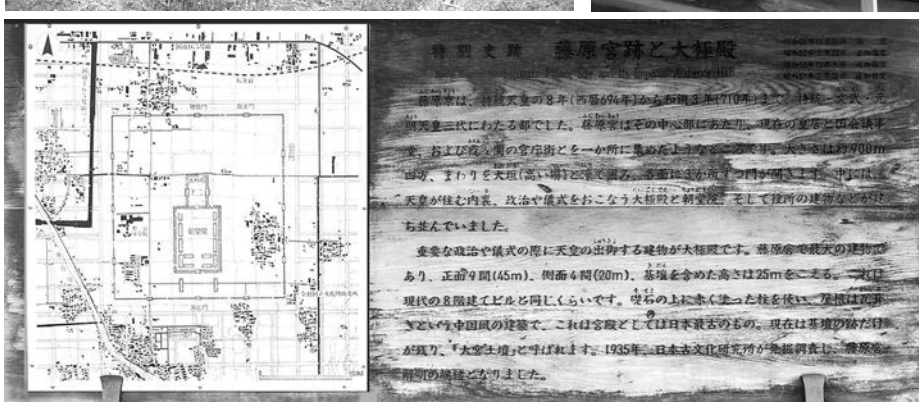
それが二上山に移されたのは、大津皇子の怨霊を鎮めるためだったようです。

大津の刑死後、半年して、持統女帝（当時はまだ即位しておりません）の実子、草壁皇子が亡くなっています。大津の祟りと言われていますが、皇位を継がせようとした草壁が亡くなり、自らが即位せざるを得なくなったわけです。

この藤原京も造営後間もなくして、平城京へ遷都することになります。これも大津の祟りが原因かも知れません。平城京遷都後、新たに薬師寺が西の京に建立され、寺内に大津皇子をまつる薬師寺龍王社が建立されました。

藤原京の本薬師寺跡

薬師寺龍王社



藤原京の跡地から香具山を見ています。

列柱の背後に樹叢(じゅそう)があり、その後ろは近鉄電車が走っています。

44

子どもの頃、ああこれから辛く厳しくしんどい人生が始まるんだな……と思ったのを覚えている。できるなら大人にはなりたくないな……と。

生まれてきたということは闘いの幕開けに等しい。相手に勝つためにどうすれば良いのかを学ぶのが人生。生易しいことなどいってる場合ではない。生き馬の目を抜く世の中とは実に的を得た表現。勝つこと。勝ち続けること。負けたら終わり。負けは死。力を付けよ！ありとあらゆる力を付けよ！強靭な体力、精神力。相手をぶっ潰す論破能力、何よりすべてを見通す人智を超えたパワー。それらを備えることで、圧倒的な能力を手に入れてはじめて生きた心地になるのだ。

そんなこと簡単じゃない。分かっている。だから生きることは苦しみ。生きて地獄なのだ。

びくびくおどおどの毎日。いつも何かに追われている、監視されている感覚。どこにも逃げられない。恐怖と絶望感がいつもいつも心にある。それらとともに生まれてきた。

だから常に心は重く暗い。

それが当たり前だと思ってきた。それを認められなかった。でも苦しかったのだ！

心が張り裂けそうな日々を今世も送ってきたんだ！

苦しかった自分を出してやりたい。どんどん出してやりたい。

ああ、お母さんなんて呼べなかったなぁ……。自分が崩れてしまいそうで……。

その自分ってなんだ?! ホントに自分か?

肉にガッチリしがみ付いているから何も分からなくなってしまっていたんだなぁ……。全部、ぜ〜んぶ、やめられたらいいなあ……。

45

今世の私は巫女そのものでした。誰にも負けてはならぬ、弱音をみせてはならぬ。人の目に映る自分はいつも素晴らしくなければならないと律してきた反面、人の目に恐怖し怯えてきました。いつも周りと戦ってきました。絶対に馬鹿にされてはならぬと人の上に立って話をしてきました。

また神、占い、パワーを求めてきました。誰一人、自分さえも信じられない底知れない寂しさが目に見えない力を求めてきました。聳え立ちの反面、自虐してきました。肉を本物とする中で凝り固まった思いは心にどんどん重石を積み重ね、自ら苦しみの坩堝に落ちてきました。自分の本音など言えない、心は岩盤のように固く苦しみで蠢いていた。思いを呑み込んできました。

巫女の時に神の声をこの口から発してきた恐怖、正しいことを言わなければ、間違えれば即刻殺される恐怖の中で神に祈り、他力に打ち込んできた心。恐怖で何度も何度も狂ってきました。自分の咽喉を突き刺し自害しすべてを呪ってきた心の重み。しかし、その思いを修正してくださいと巫女は今世、私に肉を与えてくれました。

今、その声を聴き、瞑想の中で巫女の思いを抱きしめられることが喜びです。巫女はずっと待っ

てくれていました。私に気付いてくださいと訴え続けてくれた思いに添うことなく、見て見ぬふりをしてきた肉の愚かさ、冷たさに懺悔です。

「おかあさんの中に帰ろう。私達は意識です。永遠に生き続ける命、エネルギーです。私たちの心はどこまでも広がってくよ。おかあさんが待ってるよ、愛へともに帰ろう」

巫女から喜びが伝わってきます。おかあさん、ごめんなさい。私はずっと母に捨てられたと怒り呪ってきたけれど、母を切り裂いてきたのは私でした。おかあさん、ありがとう。田池留吉、ありがとう。

七月の種水判定で巫女とともに橿原の地で田池留吉を思い反転できたこと、嬉しかったです。アマテラスとともに巫女とともに、学べる今を喜んでいきます。

46

学びの中で「アマテラス」という言葉を初めて聞いたとき、戸惑いながらも、母の反省をとおして、そう言えば、母の口から「天照大神」という言葉を聞いたことがあったのを思い出す。これまでの、母に対する思いのエネルギーが、「お前が、お前がアマテラスだ」と叫んでいた。その心を確認する機会が、一年前の橿原セミナーでした。

ああ、お母さんには、ただただ崇める思いで従ってきた。厳しい中にも素直に仕えてきた。ふと、甘え心を出せば、すぐに振り払われる。話しかけると、返ってくる言葉は、否定的な思いにすり替えられる。それどころか、軽蔑の眼差しでさげすまれる。

「くそっ！なんでこうなんだ。許さない、絶対許さない。」呪う思いが時おり出てくる。何かと引っ張り出される私を見て、見て見ぬふり、手も貸してくれない。自分で、一人でやっていくしかないことに気付く。強くなるためには、パワーしかなかった。一つのパワーを出したら、その次のパワーに利用し、新たなパワーを求めていく。求める欲の思いが際限なく続き、止めることができない。パワーの世界、己一番、我を見よ、自己顕示欲のかたまり。もう、どうしようもない。

ああ、私が、私自身がアマテラスそのものであった。お母さんごめんなさい。間違っていた。間違ってきた。そして、学びに出会い、田池留吉と出会い、アマテラスも温もりに帰れるんだということを教えていただきました。

それはそれは嬉しかった。本当に嬉しかった。お母さん嬉しいね、ともに田池留吉のところに帰れるんだよ！こんなに嬉しいことはないね。田池留吉、ありがとうございます。

これまで、なんに対しても、心底喜べない自分いた。それがアマテラス、巫女の思いと切り離せない、「思いの世界」というこの学びに出会い、その凄さを、今更ながら痛感しているところです。

47

寂しい。寂しい。寂しい。辛い。苦しい。何で私は生まれてきたんだ。こんな苦しみだけなら生まれたくなかった。どうすれば苦しみから解放されるのか。その思いから必死でパワーを

求めた。自分の能力を高めること。それが私の幸せの道。認められれば寂しくない。一時の苦しみも乗り越えられる。そうやって、なにくそ魂で自分自身を奮い立たせて頑張ってきた。頑張っている間は、寂しさや悲しみを忘れられる。もっと、もっとと貪欲に求めた。次第に認められることが喜びとなり、周りと戦ってきた。私を一番に認めて欲しい。認めろ。認めろ。その感情をストレートに出すとみっともないし負けだ。恨み、嫉妬、競争心を隠しながら、しかしその思いは凄まじいものだった。苦しいけれど、戦うしかなかった。

また、思い通りにならなかった時の恨み憎しみの思いも凄まじかった。

しかし、どれだけ自分の能力を高めても、認められても、寂しさや苦しみから逃れることはなかった。なぜだ。すべては私を生んだ母親が悪い。そうやって最終的には母を憎むことしかできなかった。

私は、母に捨てられたという思いを強くもっていた。どんなに優しくされてもいつか裏切る。裏がある。甘えられない寂しさよりも、捨てられたときの悲しみ、苦しみを味わいたくない。誰も信じられない。信じられるのは自分だけ。この思いをしっかりと持っていたから寂しかったんだって今は思う。

苦しんできた自分を思います。苦しかった。苦しかった。寂しかった。辛かった。あぁ私が私を苦しめてきた。間違ってきた。ごめんなさい。誰かにじゃなくて、私が私にこの思いを認めて欲しかったんだ。

一緒にお母さんを思います。お母さんごめんなさい。間違ってきました。私がお母さんを捨てました。お母さんありがとう……。

もっともっと自分の思いを語っていきたい。ありがとうございました。

聖徳太子誕生地（現橘寺）

難波大道、竹内街道、横つ道を通り、いよいよ飛鳥に到着しましたが、ここでは長居はせず、このあと、日本最古の官道「山辺の道」を歩き、滋賀の「大津宮跡」、三重の「斎宮御所跡」を歩いていこうと思います。

板葺きの宮跡を見る蘇我入鹿の首塚

48

巫女の時の自分に思いを馳せようと思います。思いを馳せるならできるかな。巫女やアマテラスという文字が入った文章を読んでも焦点定まらず、思いを向けようともしていませんでした。

高校ぐらいの時だったか、母親に対して、面と向かって「俺は生まれてきたくて生まれてきたわけじゃないよ」と言い放ったときの母のなんとも言えない顔は覚えています。

小さいときから憶病でお母さんの側を離れるのがいやで、怖くていました。

小学校に入る前ぐらいのときに、小学校のグランドに母と二人で行って、自転車の乗り方を教えてもらった。教えてもらったといっても、グランドの対角線を直線で私は前を見てひたすら自転車をこいで、母はただ自転車の後ろを押して走ってくれた。グランドのマウンドをこえたところで後ろを見たら、手を放して立っている母が小さく見えた。私はバックネットの手前で倒れて、擦り傷は負ったと思いますが、それで自転車に乗れるようになった。そういえば後ろの方で「乗れてるよ、乗れてるよ」と母が言っていた。

大人になってからふと思い出して、母に聞いたら、幼少のころに、大阪に住んでいる子供がいない伯父に私（三人兄弟の二番目です）を養子に出すような話があったようで、伯父からは何度かそのような手紙をもらっていました。思い返すと母への思いは、「自分で産んだんじゃないのかよ、なんで俺を産んだ、それでも親か、おまえそれでも母親かよ、何とかしろよ、俺のことを何とかしろ」でした。

母親に連れられて、巫女に出されるずっと前に、パワーを強く、既に求めているんだと思い

ますが、これも焦点定まらずです。田池留吉に思いを向けて、母親の反省をしていきます。今回このように書かせていただいてすごくよかったです。ありがとうございました。

49

自分を顧みることなく、自分と向き合うことなく、闇を噴出し続けてきた私にとって、田池先生との出会いは千載一遇のチャンスでした。自分の心を見るということを教えていただきました。本当にありがとうございました。

私の中の巫女へ思いを向ける時、劣等生、落ちこぼれ……と出てきます。いつも周りと比べ負けるものかと競争し、霊能力の低い自分は駄目だと心を小さくしてきました。卑弥呼に憧れながら、でも常に中途半端。自分で自分を追い込み、崩壊していきました。

しかしあるセミナーで、塩川さんから「我は卑弥呼なり」という呼びかけがありました。その時心に感じたのは、「我こそは卑弥呼なり！」と己を大きく現し、我こそ一番と誇っているエネルギーでした。驚きました。この思いが、巫女だった私の心の底に流れていたことに気付きました。こんなに己を現すエネルギーを心に持ちながら、どこかで自分を犠牲者のように思っていました。

心を見ることは本当に凄い

復元された卑弥呼の館

です。今世は、我一番が出やすい環境を選んで生まれてきました。

「もう比べなくてもいいんだよ。ともにともに帰ろう。お母さんの温もりへ帰ろう。愛へ帰ろう」と、自分に伝えます。お母さんが待っていてくれる。お母さんが、両手を広げて待っていてくれる。何度も何度も裏切ってきたけれど、私は母の思いに帰ります。必ず必ず帰ってまいります。お母さん、ありがとう。しっかりと心を見てまいります。田池留吉とともに、アルバートとともに歩いていく自分を信じてまいります。ありがとうございました。

50

幼い時から、お母さんに甘えたかった。いつも側にいてほしかった。「抱っこして」「おんぶして」。歩けるようになると、出かける時は必ず手をつないでもらった。お母さんの姿が見えないと、いつも探していた。姿が見えただけでホッとした。

それが小学校に入ると一変した。たくさんのことを学ばなければならなくなった。自分のことは自分でする、しっかり挨拶や話ができるようになる、行儀良くする、生活が大変窮屈になってきた。今までのようにお母さんに甘えることは許されなかった。お母さんに叱られる時は悲しかった。叱られる理由なんてどうでも良かった。あれだけ優しかったお母さんが、厳しく僕を躾ける、守れないと容赦なく叱る、それが寂しかった。いつも同じことで叱られていた。「何辺言うたらわかるの」耳にたこができるくらい聞かされた。

ある時病気で長期入院した。お母さんは毎日看病してくれた。懐かしかった。あれだけ優し

いお母さんを見たのは久し振りだった。体はしんどかったが、幸せなひと時だった。お母さんが側にいてくれる、思いっきり甘えられる。それだけで良かった。

退院するとまた、同じような生活が戻ってきた。お母さんだけでなく、先生や友達からも、何か言われないかと、びくびくした生活を送っていた。中学になると、そんな自分が流石に情けなかった。

僕はこんな情けない人間じゃない、友達がバラバラになって弱い自分を知っている者がいなくなる高校がチャンスだ、ここで素晴らしい自分に蘇ろう、と固く誓った。

高校入学と同時に、弱い自分は見せない、誰とでも自信を持ってはっきりと話す、構内行事にも先頭に立って参加する、勉学やクラブ活動も頑張った、これだけのことで、周りの僕を見る目が一変した。ある時保護者懇談があって、お母さんが帰ってきて僕に言った。「担任の先生が、この子は凄い子だ、と言っていた」、と驚いた感じで話した。このとき僕の中は叫んだ。もうあんたの指図は受けない、他の人の指図も受けない、と。お母さんと決別した瞬間だった。

それからは、素晴らしい自分を磨く人生街道をまっしぐらに進んだ。寂しい思いを奥底深くに押し殺して。巫女の時代に生きた自分と重なって感じる青春時代です。

51

私は、幼い頃、巫女を育成する為の訓練所に、母に連れて行かれた頃の思いが、心の中から溢れてきました。私は、母に力の限り、縋りつき「私を置いていかないで、一緒に連れて帰って」ありったけの声で叫び続けました。でも、母は、私を訓

練所に引渡し足早に去っていきました。その後ろ姿が、現象の時間、一瞬見えたように感じました。

今世も又、私が、四歳の時、何の縁もない夫婦のもとへ養女に出されました。その時、私は、母のもとに、帰りたいとか、悲しいとか、思わなかったのです。今にして思えば、とても不思議です。私は、四歳だったけれど、母を抹殺していたのです。遠い昔、巫女になる為に訓練所に連れて行かれた時の思いを心の奥底に閉じ込め再現したくなかったのかもしれません。私は、今世、自分の人生を呪っていました。こんな人生なら生まれてこないほうが良かったと、十一、二歳の頃、自分の存在を自分で、否定し、辛くて、悲しくて、夜、布団に入ると泣いていました。でも何とか私が、生きられる方向性を見つけたかった。誰にも、私の心の内を話せないから、心の中で、思っている疑問を追求したくて、生きる術を本から得ようと多くの本を読みあさりました。

二十一歳の時、主人との出会いがあり、二十四歳で結婚して、とても幸せな日々を過ごしていましたが、姑が真光に入会するように勧めたので、私は反発もできず入会しました。私はそれからずっと宗教遍歴を重ねていきました。もしかしたら、私が求めている解答があるかもしれないと思い、宗教書も多く読みました。高橋信次氏の教えに触れた時、これだと思い心酔しましたが、病気の為に亡くなられました。その後も私は宗教遍歴を重ねましたが、納得できる教えには巡り合うことはできませんでした。

しかし、希望を失いかけた頃、この学びを知り、田池留吉氏のセミナーに参加できました。私は、やっとたどり着くことが叶ったと思いました。それから二十六年学びをさせていただけて、今はとても幸せです。

最近、巫女に心を向ける現象を通して、私は今世も母に四歳の時捨てられた。だから、良かっ

復元された卑弥呼の館（大阪府立弥生文化博物館蔵）

た。母に捨てられたから、本当のことが知りたい。なんで生まれてきたのか知りたいと思う、出発点になったのです。母は捨て身で私に伝えてくれていたのです。今世こそ、自分の本質に気付いてくださいと自分の想いを賭(か)けて、私を産んでくださったことに、私はやっと、お母さんのメッセージを受け取ることができました。だから、今世私は初めて、お母さんに「産んでくださってありがとうございました」と言えました。私の人生は決して不幸ではなかった。田池留吉の意識に出会える計(はか)らいの中で生かされ、至れり尽くせりの人生でした。本当に私は、幸せな意識です。すべてにありがとうです。

52

七月の橿原セミナーで巫女の自分に向ける瞑想をして以来、何度か巫女の自分に向けて瞑想しました。以前向けたときと違うのは、かつて競い合ってきた巫女仲間と

ともに田池留吉に心を向けられる、お母さんと呼べることが本当に嬉しいと思えるようになったことです。

地域の勉強会で巫女の思いに向けたとき、学びの友の「お母さん、助けて」という叫びが聞こえてきたとき、胸が絞られるような思いになりました。

一人で瞑想し、改めて巫女の自分に向けたとき、私もお母さんに助けを求めてきた、助けて欲しい、ここから救い出して欲しいとどれだけ願ってきたことか。でも結局助けてもらえず、悲しく寂しい思いで死んでいった、という思いが上がってきました。

お母さんは助けてくれなかった、助けてくれなかったと訴える自分の思いをしばらくじっと見つめていると、そうではなかった、そうじゃなかった。お母さんはいつも私を助けてくれていた。肉をなくした後、真暗な暗闇のどん底にうずくまっていた私に何度も何度も新しい肉体をくれた。何回も、本当に諦めずに愛に帰るチャンスをくれていたという思いが心の奥底から湧いてきました。適切な言葉かどうかはわかりませんが、これ以上の救いはないと思いました。そして今世は肉を持った田池留吉、田池先生に出会い、学びに触れることができました。今世の母を通じて本当に最短距離で出会わせてもらいました。

私はいつの転生でも巫女の思いそのままに生きてきました。巫女であったときも、そうでなかったときも。巫女の自分はいつの世でも常に私とともにあり、知らず知らずのうちに巫女のエネルギーを使って生活し、人生を終えていました。自分の過去に思いを向ければ一様に皆、苦しかった、苦しかった、苦しかった、本当に苦しかったと伝わってきます。ずっと苦しい転生でした。

大和川の上流「初瀬川」は山辺（やまのべ）の道のはじまるところであり、仏教が日本に初上陸した地とも言われています。このちかくにある「海石榴市（つばいち）」で、仏教反対派の物部（もののべ）氏により、日本初の尼「善信尼」が裸にされたうえ、公衆の面前でむち打たれ迫害されました。この後、仏教の流入が「巫女」の役割を「仏教僧侶」が担うこととなり、明治期に復権するまで、神道は仏教に組み込まれていきます。

今、巫女の自分に向けるとやはり苦しかったと、思いが上がってきます。でも、ともに帰ろうと呼び掛けられる私がいることも感じています。以前は誰も助けてくれない、誰もこの私の苦しみをわかってくれないと絶望していましたが、今はともに歩む私がいる。私が巫女の私の側にいて、お互いに寄り添ってともに歩める。そのためにお母さんは私に肉体をくれた。苦しんで苦しんできた私に私自身が手を差し伸べられるように。そんなふうに思えるようになりました。

ほんの少しずつですが、巫女の自分とともにこれからも螺旋を描くように進んでいきます。

53

語るものか、決して語るものか、心をがんじがらめに縛りつけてきた。苦しかった。

失敗を許さない冷酷非情な心。形、形、形と、形を整えることに必死になっていった心。細かいことまですべて牛耳っていく心。特別な自分。すばらしい自分。我を見よの自分。正当化する自分。

今世もこの心で生きてきた。結婚、出産、子育て。巫女の時の教育係の再現だった。比較、競争、優劣、上下の中で瞬間出すエネルギーは、怒りと闘いのエネルギー。

容赦しなかった。自分の意に添わねば即、抹殺。そんな猛々しいエネルギーしか感じられなかった私でした。

しかし今、私の中に何とも言えない哀しい切ない思いが伝わってきます。母を呼びたくても

呼ぶものかと呪いと恨み、憎しみの中で必死に押し殺してきた思いが、お母さんを呼んでいます。お母さんお母さん……寂しかったよお母さん、お母さん……お母さん寂しかった……。

私はアマテラスとともに帰りたかった。お母さんの中に帰りたかった。だから今世を用意しました。

54

七月の橿原セミナーで、最前列に座っている人達が呼ばれ、一斉に巫女に思いを向ける現象がありました。その光景は、圧巻でした。瞬間、私の心に衝撃が走りました。

壮絶な巫女の一生が、心によみがえりました。権力者の為に、神託を受けるべく感性をとぎすます修業につぐ修業の日々。比較、競争、裏切り、忖度……。そんな巫女の世界で、常に神経を張りめぐらせ、自分が生き残っていける道を模索しました。そして、ただひたすら上に上りつめていくこと、認められることを願ったんです。

でも、私が恐ろしかったのは、仲間が一人二人と狂っていき、そうなると、どこかへ連れて行かれ殺されるという現実を知ったことでした。恐怖心を抱えながらも、日々神でない神を心に呼び、神託を受けるうちに、その意識が私を支配していきました。どんなに離そうと思っても離れてくれない。

常に見張られ、語ってくる声が聞こえ、夜も寝かせてもらえません。だんだん狂っていく私を、皆は異様なものを見るような目で見ました。狂おしいほどの孤独でした。眠れない夜が明け、日が昇っても、砂をかむような心の私を、無残

な死が待っていました。「お母さん！お母さん！私の人生は、何だったんでしょうか？こんなことをする為に生まれてきたのでしょうか？」

巫女だった私の悲しみ、苦しみが、すぐ隣にありました。

本当におかしな話でした。権力者の肉にだけ都合のいいことを願い、祈るなんて……。全くばかげたことを、絶対しなければならないこととして自分に課し、どれだけ自分を苦しめてきたか……。今世もそれは同じでした。

「お母さんに抱かれおっぱいを飲んでいた時の自分を思い出そう」

そう私の中の巫女に語りかけます。

「今世、田池留吉に出会えたから、しっかり心を向け、肉の世界が本物だと思った間違いに気付いていこう。あの時仲間だったみんなも、心を見て、自分の間違いに気付いていっているよ。ともに歩いて行こう。みんなひとつだよ。」

55

二上山。小学校の二上山登山遠足だけを鮮明に覚えています。何度も何度も振り返りながら山を下り、そしてもう一度この山へ来たいと思い、駅の名前を一生懸命覚えました。二上山と書いてありました。とても不思議でした。でも今はわかります。二上山懐かしい山、山道から見えた景色、裾野から見た山、空、覚えていたんです。心の中がしっかりと鮮明に覚えていたんです。巫女として過ごした二上山。間違ってきた間違ってきたと叫んでいます。肉を信じ絶望し死を選びました。何度も何度も繰り返しました。己を表すことだけ

を繰り返しました。騙し騙され裏切りの嘘のなか殺されるなら殺してしまえ、そんな思いだけを使い続けました。どれだけ綺麗な言葉を並べどれだけ綺麗に身を整えても身も心もズタズタで笑うことのない人生でした。幼い幼い頃あの頃は笑っていました。笑えたんです。無邪気でした。純粋でした。すべてが幸せでした。でも、もう笑うなんて忘れてしまいました。幸せになりたかった、ただ幸せになりたかっただけなのに一体何が間違っているというのですか。一生懸命生きただけなのに裏切られ殺されていきます。何もかも恨みました。どうせ死ぬならすべてを利用して自分さえも利用し、そして欺いてやる。すべてのものに対する仕返しだ。呪い狂い暴れ狂い野垂れ死にました。

誰か教えてください。私に教えてください。でも誰にも聞けない。すべてが敵だから。神を思っています。心の中でいつも神を呼んでいます。でもどんなに呼んでも神なんてこない、けれども呼び続けました。神の声を聞かなければ聞こえなければならない。でも神なんてどこにもいない。誰か助けてください。私に真実を教えてください。なぜ生きているのですか、何のために生きなくてはならないのですか。生きていても仕方がない。だから死を選びます。

田池留吉に出会うまで、ずっとずっと心の中でざわめいていた思いでした。

56

巫女を思う。巫女の意識とともに学んできました。

今世、田池留吉の肉との出会いを切望したのは巫女の私の意識です。橿原セミナーの現象の中で、突き上げてきた巫女の叫びから、巫女を思う思いが変わっていきました。私の中の巫女

山辺の道　まきむく日代宮への道

の意識達の叫びを、セミナー現象の中で繰り返し繰り返し、心で感じ確認できた時間と空間をいただけたことに感謝しかありません。今世、幼かった時の自分を思い出せば、闇に敏感という意味が素直に頷けるんです。一つ一つの現象が巫女の意識に繋がっていた。だから、橿原の地も二上山も私にとっては恐怖の存在でしかありませんでした。この思いこそが巫女の思いでした。殺戮を繰り返し、醜くて汚い狂喜の思いの自分から逃げ続けてきたことを気付かせてくれました。すべての転生は巫女の思いを引き摺り大きく膨らませて、狂喜の思いの中で生きてきた。生きている。今世は、望む望まないに関わらずチャネラーだったのだと受け止めることができました。孤独な中で自分と戦い続けてきた意識です。間違い続け狂い続けた私の意識の世界の現実を、田池留吉の肉との出会いがあったから気がつくことができました。そして、今

がある。田池先生と三十年という長い時間、セミナーに集えたそのすべてにありがとうしかありません。

学びに集う仲間達に出し続けてきた思いのすべてが巫女の思いでした。呪い殺す思いしか出てこなかったのは当然のことでした。過去と同じ間違いを繰り返すことしかできなくなった私達でした。今世は、心の底の底の底の奥底に固まっている意識達の叫びを、自分の中から解き放っていくためには、心を見て、間違っていたことを素直に認めることから始まることを自分から学びました。そのために今世はチャネラーの肉を望みました。自分の心を掘り下げていくためでした。どんな思いで今世生まれてきたのかを、巫女の意識を通して気付けたことが本当に嬉しいです。地獄の底の底の奥底を這いつくばり這い回って、真っ暗闇の中で出口を探していた巫女の意識達の叫び、ワン、ツー、スリー

（地獄の底の底の奥底を思う。アマテラスを思う）の田池留吉を思う瞑想を繰り返す中で、自分の意識の世界の現実と真向かいになれる私達は本当に幸せです。

今、セミナーの中で核から流れる異語がストレートに心に響くようになりました。一瞬にして中の巫女の意識達に反応して叫びが飛びます。肉の思いで遮っていた肉基盤の自分に気付きながら、こんなにもこんなにも苦しいと叫んでいたんだ。ごめんなさい。懺悔の思いとともに、今度は、こんなにもこんなにも田池留吉の波動に出会えた喜びを伝えてきます。その瞬間の喜びだけが本当の喜び、この喜びは、「私は愛です。私達は愛でした。」そう叫んでいる。田池留吉が指し示してくれた、この道を一直線にと意識達の喜びが後押ししてくれている。ともに行こう、いざ行かん、この思いと一つになって喜びを広げて行きます。

巫女の意識達とともに、田池留吉、アルバート、母なる宇宙を思えること喜びです。真っ直ぐにこの道を、心から思える今が幸せです。

57

お母さん、助けて。お母さん、助けて、怖いよ。声にならない叫び声がきこえる。

巫女だった自分に思いを向けると真っ暗な中に閉じ込められて小さくうずくまって、恐怖と不安でいっぱいの自分を感じる。

比較競争、妬み、恨み、嫉妬、呪い、蔑み、足の引っ張りあい、いつ落ちるかと戦々恐々の恐怖、自分を守ることに精一杯なのに、自分をうまく扱えない。どうしようもない自分に最後は恐怖の中で死ぬしかなかった人生。

ずっとそんな中にいたことをようやく認めることができました。

まだまだ、巫女の自分と向き合うことは、苦しい。

でも、この自分と向き合うために今世の肉をいただいたことは確かだ。

自分の中にこんなに真っ黒な妬みや嫉妬、競争心があることを今まで認められなかった。確認できなかった。ようやく、認めて苦しみに耳を傾けて受け入れていこうと思えた。まだまだだけど、ここからやっていきます。巫女だった自分に温もりを伝えて、ともに帰ろうと。そのために肉をいただきました。

貴重な学びの機会をいただいて、ありがとうございました。

山辺の道　桧山神社から見る二上山（春分・秋分の頃には雄岳と女岳の間に陽が沈む）

58

今までも橿原セミナーで巫女に向ける瞑想がありましたが、私はまだよく分からないと思ってきました。

二上山を見たら何か感じるだろうか、思いが湧いてくるだろうかとホテルの部屋の窓から眺めてみてもこれというものがありませんでした。

今回の七月橿原セミナー二日目、「巫女の心をひきずったまま今世生まれてきた」という内容の話を聞いていた時、分からないのではなくて、分かろうとしなかった、みたくなかったのだと思いました。

一番前の列に座っている人は一つ二つ前に出てそこに座ってくださいと言われ、そのように座りました。そのまま巫女を呼びともに帰ろうと思う瞑想をした時、ものすごい叫び声が出ま

した。何回も何回も出ました。ずっとずっと閉じ込めてきた思いです。巫女（みこ）の時の思いが叫び声になって何回も何回も出ました。

同時に優しい思いも感じます。そして、私は自分に冷たかったと思いました。嬉しい瞑想でした。

59

今回の橿原で、また巫女の時の私に思いを向けることができました。実は、この橿原セミナーの二週間ほど前から、私の中から、特に権力者に対する思い、「くそーくそーお前になんかに負けるもんか」、そんな思いがことあるごとに出続けていました。改めて、私はこんなにもくそーの思いを出し続けてきたんだと思うと何だか嬉しくもあり、この思いをもっと丁寧に見ていこうと思っていました。

思えば小さな頃から、私の一番身近な権力者は実家の父であり、私にとっては絶対的な権力でもあり、私は、「くそーいつか私が力を持ってお前に私の言うことを聞かせてやる」、そんな思いを使っていたことを思いだしました。また、幼い頃より仲良しだった友人二人は地元一の名家でもあり、いつもその権力者の二人が認められているように感じられて、くそーいつか私が頂点の力を持って超えてやる、そんな思いを持ち続けてきました。現在はその環境は変わっても、また同じように自分の周りに権力者たる友人を置いてることにびっくりもし、ああ私ってすごいんだなあ、ちゃんとその思いが出るようにあの人たちを周りに配置したんだなあと、その環境が何だかとても嬉しくも感じられました。

そして、橿原セミナー、私にとっては毎年七、八月の橿原は、卑弥呼（ひみこ）（巫女の頂点）の夏、巫

女の橿原と言う思いで、とても橿原セミナーを楽しみにしていました。

塩川さんから、巫女の頃の思いに向けましょうのかけ声があり、私の中から、うわーと何とも切ないというのか苦しいそんな思い、叫び声が飛び出してきました。その巫女の時の私に思いを向けられたことが本当に嬉しかったです。そして、今世の私の人生、特に前半の私の人生は、巫女の思いそのものだったこと、実家が工事関係の家業だったこともあり、一族の繁栄と安全無事と安寧を毎晩祈って眠りについていたことを思いだしました。その行為は誰に教えられたわけでもなく、私が勝手に始めたことで、そのことも今思うと、本当に不思議、折に触れて、巫女の頃の私がその存在を私に伝えてくれてたんだなあと、やっと今そう思っています。巫女の時の私の思い、頂点を目指しすべてを手に入れようとしてきた思い、その思いのままにいつの転生も私は存在してきたんだと思います。そのためにはどうしても人智を超えた力、パワーが必要だったのです。それが私にとってのアマテラスだったんだと、心から納得です。その巫女の私の思いをしっかり供養しないと、今世もまた失敗なんだということも痛切に感じさせてもらいました。巫女の時に培ってきた頂点を目指すこの思い、その私の思いに田池留吉のほうへアルバートのほうへ、ともに帰ろうの思いを語り向け続けてまいります。そうできることが、本当にとても嬉しいです。私の宇宙が変わっていける今世、本当に本当にありがとうの思いでいっぱいです。

60

私は立派、私は素晴らしい、神の声を聞く者。

我を認めよ。我こそ一番なり。このパワーを認めよ。この思いで巫女の時代を生き抜いてきた。その心のまま今世肉体を持った。あの母親に産ませたのだ。肉体を持ち、田池留吉の目の前に立ちはだかった。苦しくて、寂しくて、のたうち回ってきた。どうしてもこの思いを何とかしたい。狂いに狂ってきた自分を解き放していきたい。この思いが今世実現した。田池留吉と出会い、真実の波動に触れ、自分の実態を知った。現実を知った。巫女の時の自分から、男にもてあそばれ、利用され、捨てられた悲しさ、苦しみ、虚しさ、切なさが毎日伝わってくる。神の声など存在しないと知りながらも、心を向けざるを得なかった虚しさ。虫けらのごとく扱われ、生きる意味も価値もない。こんな心を抱えて、幸せになれるはずがなかった。お母さんなんて素直に呼べるはずがなかった。この心を全部洗いざらい吐き出して、そして必ず見えてくる世界がある。今はまだ実感が少なくとも、間違えなく田池留吉は「私は愛です」と伝えてくれた。「母の温もりはあなたの中にあります」とも伝えてくれた。何もいいところなどなかった。認めてもらうものなど何もなかった。ただただ真っ黒なブラックの自分であったことを自分に知らしめたかった。自分の実態を知りたかった。偽物の愛を愛だと信じてやってきただけだった。巫女の自分から伝えていただいた真実でした。巫女の自分の叫びから、母の温もりを捨て去った愚かさ、肉、形の世界を本物とする思いの愚劣さを知った。何も分かっていなかった。この事実に気付いたとき、嬉しかった。本当に嬉しかった。もう何も臆することはない。崩して、崩して、総崩壊して見えてくる世界を楽しみに、母の反省を通し、ゼロ歳の自分から母の温もりを学んでまいります。この思いを大切に、大切に学んでまいります。ありがとうございました。

山辺の道　大神神社はお酒の神様でもあり、11月には関西の酒造メーカーが集まります。

61

「全員巫女でした。」の言葉に、何も、記憶は無いけど、目を閉じれば、真っ暗で冷たく苦しい、苦しくて胸が潰れそう声も出せない、冷たく重く寂しい、どうすることもできない

やっと出た言葉は、苦しい――――。こんな思いが詰まっている。これが私、逃げる訳にはいかない。ともに帰ろう。伝わらない、ともに帰ろうと繰り返す。暖かいと一瞬感じた。香世さんの手が背中にあった。出ていい、出してもいい、そう感じて嬉しかった。今も、思うと、愛のなか、そんな優しい嬉しい思いのセミナーがある。

肉は、何もわかってないのに、総動員で気付け気付けと現象です。怒りが出てエネルギーを安心して出せる。こんな幸福時間、空間がある。

苦しかった苦しかった、間違い続けて、最悪、

最低、固まっている私に、気付いて帰っておいでと、言ってくれていた。私の中で帰ろう、必ず帰ろうとの響く思いがある。
真っ暗の中でも何か違うそう思えるのがほんの少しでも嬉しい。お母さん、ごめんなさい。
ありがとう。

62

巫女の時の自分に思いを向けた時、何とも言えない寂しさと、胸の中が空っぽになる程の虚しさが、こみ上げてきました。
「お母さん、寂しい、寂しい。寂しいよ。虚しいよ。私はここにいるのに、どうして見つけてくれないの。迎えに来てくれないの。寂しいよ。」
叫んでも叫んでも、自分の声はどこにも届かない。

巫女として、お母さんの元を離れ、修行をしていた時の思いなのか、心に響いてくるのは、寂しさと虚しさでした。
しかし、今の巫女としての環境、地位、名誉を保つために、何としてでも。と言う必死な思いも感じました。そして、さらに素晴らしく！誰よりも素晴らしく！神の声を聞く者として、そびえ立っていく思いと、神以上の力を手に入れようとする、欲深い思いも出てきました。
「なにくそ！なにくそ！邪魔なものは切り捨てろ。身内や、友達、誰も信じない。信じるのは、より素晴らしい神。お母さんなんて、邪魔だ」と、あれ程求めてきたお母さんまで、私は切り捨てていました。
「我は素晴らしい。我こそが一番。邪魔な者は消えろ！殺せ、殺せ！我に逆らう者は、八つ裂きにしてくれるわ。」
神の声を聞き、人々に伝え、尊まれる存在の

巫女は、外見は清らかを装い、中は殺戮を繰り返していました。

しかし、自分が垂れ流す狂った思いは、そのままにして、人々に神の声を伝え続けてきました。自分の中に響く声、思いは、神からのお告げだと信じ、肉の自分をより立派にさせるために、人々に伝え、世の中を牛耳ってきました。それが、間違いだと言うことも知らず、必死に生き続けてきました。

もう一度、巫女と思った時、「こんなことをしたかったんじゃない」と響いてきました。

本当はこんなことをしたかったんじゃない。でもこの方法しか知らなかった。肉がすべてだった。自分の中には、確かに響く思いがあった。それを人に話せば、人はその声は神の声だと言い出した。神からのお告げ。人々は喜び、生きる活力として、神の使いだと言いだした。巫女の自分も、人から利用される道具に過ぎないと

山辺の道　磐余池　大津皇子の処刑地です。大津の妻・山辺皇女も
夫の刑死後、後を追い、この池に身を投げました。（今は埋め立てられています）

言うことを知っていました。しかし、道具は嫌でした。だから、人々を操(あやつ)る存在になろうと、肉を立派にさせていきました。

間違いでした。自分に響く声は、神の声じゃなかったんです。自分の中から響く声は、愛に帰ろうとする意識の叫びだったんです。

今世、田池留吉の肉を通し、真実を知りました。

私達は愛に帰る意識。愛。と伝えてくれました。再び、田池留吉を思い、巫女(みこ)の時の自分を思いました。

嬉しいです。自分の中に響く思いは、愛だと知りました。己を表す為に、人に伝えるのではなく、愛に帰るために、自分と対話をしていけばいいんですね。私がしたかったことは、それだったんですね。嬉しいです。お母さんに捨てられたと思ってきました。巫女の時代、確かに肉のお母さんと離れたかもしれません。でも意識のお母さんはずっと待っていてくれたんですね。

嬉しいです。愛に帰れる。私は愛だった。目覚めていきます。真実に触(ふ)れた意識は、仕事をしていきます。地に落ちた意識だから、自分の中の愛に帰れる喜びは、凄(すご)いです。「ありがとう。さみしかった。間違ってきた。嬉しい」と響いてきました。

何度も巫女の時の自分に思いを向ける機会を頂き、その思いを、今世やっと見ていけるという喜びと、巫女の自分は温もりに帰れる、帰っていこうとする仲間だったんだということを感じ、とても嬉しかったです。

田池留吉との出会いを、どれほど心待ちにしていたか、どんどん喜びを伝えてくれる意識との対話を、楽しんでいきます。ありがとうございました。

右奥の小高い丘が卑弥呼の墓と言われる箸墓古墳です。

63

巫女を思って瞑想したとき、恐怖と不安の思いが突き上げてきた。恐怖と不安の巫女を強く感じたので私はそこに心を向けてみました。

巫女と私。それぞれ時代、環境、現象は違っても使った思いは同じでした。巫女は私の中で生きている。生き続けていました。恐怖と不安に思いを向けると、心に伝わってくる巫女の苦しみと私の体験した苦しみが一つになって重なった。どんなに苦しかったか悲しかったか、辛かったか寂しかったか、恐怖、不安、呪い、殺戮、苦しい巫女の思いが心にどんどん響いてきた。

私の使った思い、巫女の使った思い、すべて「肉が自分」でした。苦しんで苦しんで、間違って間違い続けてきた思いの根っこは同じ、ここにあります。私の使った思いの中に巫女は生き

ている。怖かったと心に伝わってくる思いはまさに私です、私の思いです。私に心の体験があるだけに怖かった巫女の思いを感じてたまらなかった。何と愛しいんだろう。巫女が愛しくて愛しくて涙が止まりませんでした。長い長い時を経て、今こうして巫女の苦しみは私の苦しみだったと心に伝わってくる思いを実感し確信した。今肉持つ私に苦しいよ、怖いよ、助けて、巫女は叫んでいます。他人事ではない。私は巫女をしっかり抱きしめて、私は自分を間違えたから苦しかったって語っています。

田池留吉を思いお母さんの温もりの中の自分を心に広げて、一緒にお母さんを呼んでいこうね。優しい思いで語っています。繰り返し語っています。「お母さん」。はじめためらっていた巫女が呼んだような気がしたのです。ああ、思いは通じているんだ。思いは一つなんだ。私は何も分かっていないけど、ただ意識の世界、思いの世界って凄いなー、ほんの少し感じさせていただいたように思いました。

私の使った恐怖不安の思いは私の中の巫女を過去世、来世の自分を知るための環境だったと思うと、こうして自分を繋いできたんだなー、繋いでいこうと思った。ただただお母さんありがとう、恨んだ環境にありがとう、ありがとうが溢れます。今も私の中に生き続けている巫女、実感でした。嬉しかった、ただ嬉しかったです。今一度、田池留吉を思いお母さんの温もりを思う。帰ろう、帰ろう、ともに帰ろう。帰れるんだよ。待って待ってくれているんだよ。思いが心に広がっていきます。私は今ここにこうして存在していることが嬉しかったです。巫女、アマテラスと向き合っていくことは苦しみを温もりに返す。それがどんなに厳しくても、これこそが自己供養なんですね。ありがとうございました。

邪馬台国の可能性が高い纒向遺跡

64

私達は、あなたとともにある巫女の意識です。今世も、巫女ではないあなたとともにありました。私達は、あなたに仕(つか)える巫女の意識です。いつでもあなたに応(こた)えています。ピラミッド形式であなたに仕える巫女の意識の集団です。人間とは、そんな構図を心に抱(かか)え一人の人間をやっています。しかし、肉持てば全くそのことに気付けず、自分一人で何でもやっていると己一番の世界で生きていきます。そして、やっと私達を作り続けているお母さん、あなたが、成す術(すべ)もなくもがき苦しむちょうどその時、学びに出会いました。田池

留吉の指し示す道を歩むと決めました。だから、私達は応えました。私達は、たちまち学びの虜になりました。こんなにやさしい生き方はないと自分自身に懺悔しました。あなたも頷きました。過去世の分からぬあなたは、今世のことだけでもすべて抱きしめようと決めました。だから、私達は、毎分、毎秒実践を積みました。そして、私達は、あなたに来た道を帰っていますと伝えました。あなたは、私達の存在に気付いてくれました。今世も肉基盤にずっと一緒だったんだね、ありがとう。そして、遅くなってごめんねと瞑想してくれました。私達は、お母さん、田池留吉を伝えてくれてありがとう。そして、厳しい人生を歩ませてごめんなさいと波動で喜びを分かち合いました。私達は、ピラミッド形式で連なっているのではなく、「私はあなた、あなたは私、ひとつ」と、ただ一点に吸収される意識の集合体でした。肉持つあなた、肉持たぬあなたに仕える巫女の意識の願いはただ田池留吉を思うことだけでした。肉持ってても意識です。自分を知る為に肉が必要だから、今、肉を持っているというだけです。肉持って、「私はあなた、あなたは私、ひとつ」と繋がる意識の幸せの為に生きれば良かっただけでした。ありがとう、お母さん。田池留吉と出会ってくれて、学んでくれてありがとう。

こちらこそありがとう、私はあなたあなたは私、ひとつ。田池留吉、アルバート。

65

苦しくて苦しくて苦しみしかなかった。過酷な環境の中に自分の身を置いてきました。

来る日も来る日も修行の毎日。それもすべて己を表し自分の能力を高めるため、そして培ってきたその能力を神へ奉げるため。己を信じるこ

ともできず、何もかも信じることができず、何を信じていけばいいのかも分からず、ただひたすら己を表すことだけに命を費やしてきた。本当のことは何一つ分からなかった。分からなくてもよかった。そこには温もりなんていらない、母の温もりを求めることもなかった。ただすべてを神に奉げることだけ。にもかかわらず裏切られ捨てられた時の苦しみは、恨んでも憎んでも消えることはなく、更に憎悪となって増していくばかり。自分自身を、そして母を呪って呪って呪い殺してきた。そして苦しみ、憎しみの思いを抱えながら自ら身を滅ぼしてきました。そんな過去世を数えきれないほど繰り返して、憎しみの中で死んでいくしかなかった自分。

今世、ようやく田池留吉と出会い、信じることが怖くて、信じることを知らなかった私に田池留吉は伝えてくれました。肉ではなく、限りなく広い優しさ温もりは、あなた自身ですよと。そんな意識の世界に存在している自分だったんだと。私は愛、あなたも愛、ひとつ。心で感じます。ともにともに、愛へ帰る道をただ信じて帰ろう。ありがとうございます。肉を持った今、この時、苦しみでしかなかった自分の過去世にそう呼びかけ、伝えていきます。

そして、ともにひとつ、今世こそ必ず真実の道へ愛へと帰っていきます。

ありがとうございました。

66

消えろ、消えろ、お前らみんな消え失せろ、私が一番だ、誰よりも上に立ってやる。見てろ、お前らみんな蹴散らして上に、誰も見たことのない上に立ってみせる。

私とお前らとは格が違う、見ろ、私はこんな

大津京跡（おおつのみや）に行くには、湖西線「大津京（おおつきょう）駅」まで出て、すぐ近くにある「京阪大津京駅」に移動し次の「近江神宮前」で下車します。

観光地のように目立った案内板はなく、僕が出かけたときは駅の乗務員に聞いても分からなかったのですが、なんと駅前がすでに「大津京第四遺跡」という寸法です。湖西線「大津京駅」からセミナーの開かれる「おごと温泉駅」までは３駅、約９分の道のりです。

琵琶湖グランドホテル（写真下）とホテルでのセミナーの模様（写真上）

に努力している。私の修行はお前らのような生っちょろいやり方ではない。誰よりも誰よりも努力しているんだ。

でもなぜだ、どうして上に行けない。どうして私より下の奴らが気付けば私の先を行っている。競争だ、競争。誰一人仲間なんていない。表面上は仲良くしてやっているが、私のほうが上なのだ、お前らが上に立つことは許さない。なのにどうして私は今下にいるんだ。悔しい、悔しい、悔しい。どうして、なぜ。誰よりも神に近づいていたはずじゃないか。お前らそう私に言ったじゃないか。はるかな高みを目指していたはずなのに、私は今どうして。

悔しい、悔しい、悔しい……そう出てきます。思えば学びを始めた頃、夜中に突然苦しくなって、「悔しい、悔しい、悔しい……」と泣いていたことがありました。あれは巫女の思いだったのでしょうか。

とにかく上を、高みを目指して、神のいるあの場所を目指して私は頑張ってきたはずです。なのに報われない。悲しい、辛い、とても悔しい。どうしてどうして。指導者の言うことを聞いて、真面目に真面目に、誰よりも熱心に、神の世界があることを信じて修行に励んできた、なのに報われない。あぁ裏切られた。私の信じてきたものは何だったんだろう。あなたたちが私を導いてくれるのではなかったのですか？

そんな思いを丸々抱えて、私は今世を生きています。人の何倍も努力するのに、どうしても自分の目指すレベルへ到達できないことがたくさんありました。そのたびに自分を憎み、指導者を恨み、周りの優秀な人間を妬んできました。二十代の十年間は「できない自分」との折り合いがつけられず苦しんでいました。しかしあるときふと、「あぁ、これは巫女の思いそのままだ。この思いを見つめるために、私はこの経験をし

てきたのだ」と気付きました。
形は違えど、今も私は巫女そのものです。けれど本当に時々ですが、巫女の自分が母の温もりに包まれて涙が出る日があります。その自分を信じ、これからも少しずつ巫女の思いを解き放していけたらと思います。

67

もっとすごい力を得たい、もっとすごい霊能力を得たい、そうしないと認めてもらえない。そうしないと上に行けない。そうしないと生き残れない。そんな中でずっと自分の霊能力を高めることをやってきた。それが欲であるとは全く思わずに。そのために修行の思い、欲の思いをずっと使ってきた。この思いが欲だとか考えている暇はなかった。そんなことを考えていては、真っ先に失格のらく印を押されてしまう。
苦しかった、苦しかった。どこにも気の休まるところなんかなかった。ずっと修行だった。ずっと戦いだった。勝つか負けるか生きるか死ぬかの戦いの連続だった。勝ったとしても、また、次の戦いがある。仲間も信用などできなかった。裏切りなんて当たり前だった。敵に向かっていた戦いの思いは、戦いに勝てば今度は味方のほうに向いていく。誰がこの中で主導権を握るのか、また自分を追い落とそうとするものを、先に抹殺してしまわなければならない。
こんな苦しい生き方は、いやだと思いながらも、やめることなどできなかった。ふっと心を田池留吉に向けてみた。
「あんた、こんな苦しい世界から抜けたかったんやろ。こんな苦しい世界が嫌で嫌でしょーなかったんやろ」というメッセージが出てきた。
嬉しかった！ 田池留吉の世界を選ぼうと思っ

た。二上山にも思いを向けてみた。「本当は私は喜びの山でした」という思いが伝わってきた。「みんなと喜びで暮らしていたんです。しかし、恨みと憎しみの思いがうずまく山になってしまいました」と伝わってきました。

68

巫女の思いに向けました。

素晴らしい私、素晴らしくあらねばならない思いで狂っていました。

本当に本当に長い長い間、間違ってきたと思いました。私の生きる目的は素晴らしい私になることでした。何度生まれても、この思いを繰り返し続けて、今もそのままだったんです。素晴らしい私になるためにこんなにも頑張ってきたけれど、私がなろうとしていた素晴らしい私は本当にちっぽけなものだった。驚きました。自分が誇ってきた掴んできたものがこんなにちっぽけなものだったとは、今の今まで思いもしませんでした。

うれしいです。伝えてくれてありがとう。私達の仲間が待っていると伝わってきました。懐かしい懐かしい思いでした。仲間が待ってくれていた。仲間が待ってくれていた。肉を持たない意識たち。ともに学んでいました。なんとも言えません。

ありがとう。ともに学んでいきましょう。

ともに学んでいきたいです。

69

巫女についてそれぞれ日頃に心癖として体験

している思いを書くように言われた。又、二上山に心を向けるようにと。

私は残念ながら何も思い出せないが、振り返ると父の生存中に特別にかわいがられ、日曜日には一日中自分の自転車に乗せられてあちこちに連れてもらったことが浮かぶ。母は、私ばかりかわいがっているのでへんにし（※大阪弁でねたみのこと）を起こしていたように思う。周りの方々にもかわいがられ親切にしていただいたことを思い出します。

小学校二年の時に、戦争のため福山から福塩線で近田の駅から新山のおじいさんの家に疎開（そかい）した。

父、母、妹を連れて行った。途中とても混んでいて、車中の中の便所も人々でどうすることもできなかった。福山まで当時は六時間かかった。

父は私の注文に走っている窓から抱いてさせたが、風もあり父の手はびしょ濡（ぬ）れになったが、あとはトマトだけで我慢するように言われた。

一晩だけおじいさんの家に泊まって帰られたが家のほうは召集（しょうしゅう）令状がきて、明日に出征するとのことでした。

父との別れは田舎のおじいさんの家が最後でした。

優しい父は戦場でとても寂しい、複雑な思いだったかも。体も戦場ではついて行けないことで数ヶ月で亡くなり、骨だけを受け取った次第で悲しいのは私達四人の子供を抱（かか）えて母は頑張ってくれました。

早速に母は父の背広を女物に作り直したり、ズボンはそのまま履（は）いて、警察の事務員になり頑張ってくれました。私たち四人は近所の方にお世話になり助けられた。そして、近所に巡査の独身寮があり、巡査は色々と連絡をしていただいたり助けられた。

母は結婚の前に看護婦をしていましたので、とても注射は上手で周りの方々に頼りにされあ

りがたい母でした。子供の時はほとんど忘れていますが、私たち四人の子供を守るのに大変だったと思う。

アマテラスのことを思い出しています。

私たちは、他力、他力信仰で間違ったことばかり祈って願って一生懸命頑張ってきました。

巫女（みこ）のこともすっかり忘れています。ごめんなさい。

私は一番上で己を表し、支配する心、もうすごいです。少しでも思い出して自分を修正していこうと思っています。忘れたことも多々あるが、私は今、喜び、温もり、優しさを愛しかないと田池留吉、アルバート、母の温もりをそして愛を教えていただいたことをとても嬉しく喜んでいます。ありがとうございます。

母は子供たちに教育だけつけたいと思っていた。苦しい中でも近所の学生様に教えていただ

志摩ロイヤルホテル客室からの眺め

斎宮御所跡

復元された斎宮御所の模型

皇女が運ばれた

斎宮に置かれていた機織機（復元）

天照大神を祭る地として、先に紹介した桧山神社（三輪）を出発点として何度かの遷宮の末、伊勢が最終の落ち着きどころとして定められます。このため桧山神社は元伊勢と称せられるのですが、最終の伊勢神宮に天照大神が祭られるにあたって、天照大神のお世話をする女性が皇室の未婚の女性から選ばれることとなりました。これが斎宮と言われる役割です。そして最初に選ばれた初代斎宮が、何度も登場する大津皇子の実の姉「大伯皇女」です。

選ばれると、一年間、定められた地で潔斎し、三重の斎宮御所に入り、天照大神のお世話をして一生を送ることになります。しかし、大伯皇女の場合、弟が謀反の罪で処刑されたため、斎宮を罷免され飛鳥に戻ってくることになるのです。

大伯皇女に思いを向けているあいだに、志摩セミナーが開かれる「的矢」の地は、もう間近にせまっています。嘘か誠か、「的矢」は「大和」を入れ替えて起こった地名とも言われています。

復元された斎宮御所の模型

き、それを妹たちに教えたりしたが、性格上において、偉そうに己を表し、教えたが何もわかっていないようで怖い方が先だと言われた。またしつこい、余計なことをしゃべる姉、そっくりだとも言われ、申し訳ない。みんなと仲良くしていこうと愛の中で生かされている私たち、頑張っています。ありがとうございました。

おわりに

過去、苦しい転生を繰り返し、ようやく今世という千載一遇のチャンスを眼前にしている私達です。今世、同時期に肉体という形を持ち、こうして学びと出会いました。どうぞ、眼前のチャンスを逃すことのないように、日々の時間をお過ごしください。

自分の中の巫女の思いをしっかりと聞いて、愛に帰る自己確立の道に役立ててください。

そしてそれから、もう一歩、もう一歩、歩んでまいりましょう。母なる宇宙へ思いを向けてください。巫女の心を供養するということは、とても大切ですが、そこに留まることなく、そこからさらなる一歩を歩んでください。

私達はまだまだ、宇宙を知りません。宇宙です。無限の意識の世界へ、波動の世界へ、宇宙へ思いを馳せていける、そんな喜びを一人でも多くの方が持っていただきたい、そんな時間を持っていただけたらと思います。

まずは巫女から心をどんどんどんどん解き放してください。そして、今度は宇宙と思う瞑想を心掛けてください。

塩川 香世

巫女の思い

初版発行　2018 年 12 月 2 日

監　　修　塩川香世
編　　集　UTA ブック編集部
発　　行　一般社団法人ＵＴＡブック
TEL 0745-55-8525 FAX 0745-55-8440
印刷・製本　株式会社シナノパブリッシングプレス

© UTA-BOOK, Printed in Japan 2018